

は——何、身をまかせるぐらゐの事は何でも無いものゝ（一）……またやがて窟子を
 此身が暮ふといふ事をも洩れ聞いては窟子に遇ふ邪魔をもするに違ひ無い。
 薄茶をたてたから一服呑みに来いとて頭人から使ひが来ました。時服を一服さ
 へ添へて来ました。がそれを着るなどは無論出来ぬこと。それにつけても假り屋
 まひの陣中で猶時服ぐらゐは始終あたらしいのが間にあふ驕奢と見るまゝ大内の
 衰頹も思ひ出されました。
 此頃の流行りもの、茶に事よせて人を刺し殺す風の多いところ、或はこの、今
 の茶の招待は何か思はくの有るわけが無いものでしやうか。
 爐の炭を見る油断を見てたゞ一刀に斬り殺すとか云ふこと、入り口の狹さ、坐
 敷きの勝手不自由、兎角茶室は表に優柔を見せて裏に陰險な殺氣を持つところ、
 ろこへ具足がけで出るのも素より禮で無いこと、しかし、時服にあらためれば婦
 人とは直に見て取られる譯、さて困った事でした。
 否だど云つて辭まうか。身法とあざわられるのは兎に角、何にしる、禮を以て
 ひかへた物を素氣なく返すのも智慧の無い到り。さうかどて具足がけでは出られ

す……

ひかへが再度来ました。云ひわけの口實がほとんどなま。折角の時服を着ぬの
 は親疎に論なく上も無い無禮。さア使ひに何とこたへやう。
 「まだ召されぬ。」
 不思議さうにいちごを見る使にも氣の毒でした。
 「今まのらうと思ひます。しばらく御前よろしく……」
 馬鹿が借金取りに云ふ一寸のがれのやう、出まかせの當てなしを云ひまくりま
 したが、さて跡の手段が胸につかへました。どうして、出ぬわけには行かぬ、と
 云ふ子細は、實に殺されるものならたとひ茶室へ行つたにしろ、行かぬにしろ、
 殺される事、またかよわい身をわざと茶室で殺すにも及ばぬこと。それこれ思
 ひ中てれば前の邪推もいくらか淺はかに見えました。そゝろ微笑まれるくらゐに。
 と爲ると工夫もすこし口を開きました。着様によつては時服でも大して見やぶ
 られは爲まいとの工夫が。更に三度の使ひを待つてはいよく失禮、決斷がつく
 や否や、ろの決斷がいゝにしる悪いにしる待をつけたと言ふ體で終にそれに任せ

ました。

三代將軍義満の時大内義弘が京洛に亂入した俄のさわぎの時から長袴といふものが大きにすたれて今は大抵短袴。今の時服に添へたものまづいくらか穿き宜いそれでした。殺すくらゐなら長袴にしさうなもの、變則な茶會も有ればあるもの、しかしまさか太刀を佩びる事はなるまい。で、太刀をば發して立ち出ました。手のまゝに一人で髪をうしろに束ねても天成の美色はますく句ひとぼれる手り、初春には相應の薄縹、紅顔とてり合つて天晴れ見る目も飽かぬ程でした。

扈從にみちひかれて茶室へ行つて見れば、譯も無いこと、たゞ主水助と年十四五の扈從二人ばかりでした。要するに何か相談の有る事を早くも推察しました。思はず出るしとやかな身ぶりに、はつと氣が付いては急に男めかす狂言の切なさ。唯身のこなしは何うにもまさらはして付く物の、困るのは乳の兎角高くなる事でした。始終氣をもんでは袴の下から手をさし入れて胸をきりく引きしめるその手數、素ぶりの自然をかしい様子。茶會といふのは唯名のみ、主客分坐の席でした。一服の茶も濟んで、やがて四

方山の物語りが始まつたものの、話しは、あら、飛んでも無い！

「和君は、主水助が、筒子太郎を御知りやるか？」

婦人と察されたか、しかし「和君」と言はれただけ脈は有る。唯筒子といふ一言、雷のやうに胸へとどろきました。思はず紅くなる臉。

「存じませぬ……」

「御知りやらぬ？　いかさま名にも御聞きやらでおぢやツたか？」

「名は聞きまひた」。

「うるはしい男の子でおぢやる、さながら和君のやうに」。

あゝ切ない事を云ふ！、思はくが有ツてか。無言で微笑するいちご、その下向きの顔の愛らしさ、恍惚となる程でした。

「されど世には變はつた人も有るものでおぢやる喲。筒子など、和君は御知りやるまいが、名高い茶山寺の姫御前のいちごとやらいふ人に戀はれまひたなれど、戒めに背と言ひ立てそのために遁世したとの事でおぢやる。いちご姫なんどに戀はれて知らず顔なのは男の運を知らぬ人めいた事ながらまた聞けば流石の譯もある

事でおちやる。」

すこし事實とは違つたもの、猶胸には一々こたへる言葉のはしく、ことに「流石の譯もある」とは面妖な――

「いかな譯でれぢやる。」

「かう言ふ譯でおちやる。まことを言へば窟子は――是は今日この頃知れた事――公卿の落とし子であつたその事、その公卿は誰あらう、外でも無い茶山寺……言葉の中ながら露隠りいちごの耳……」

「……の落とし子との事で、いちごとは生みの兄弟とやらん云ふ事。うれ知つてありつらう、いちごに戀はれても更に其心にしたがはなんだ。禪と云ふは言ひ脱ける言葉でやおちやつたらう。」

ても、さても、この意外、この驚き、この嘘、この眞。兄、妹、馬……馬……馬……鹿らしい――

嘘とより外いちごには思はれませんでした、いちごはまた窟子の素生を前に聞

いたことも無いことゝて。せめて今の主水助の言葉に近い事を前に聞いた事が有つたものなら――しかしさうでも無い事。神ならぬ身の、窟子は、茶山寺の無いにしろ、公卿の落とし子とはまだ信じませんでした。

しかし、氣にかゝる。どうも黙つて其話しても雲霧と見做してたと耳朶を無駄に通らせる譯には行かぬ事でした。

よそほふ氣でも顔色は自分ながら常と違つたやうに思はれました。目や手や其他一切の遣り場、注ぎ場がほとんど無いやうでした。

「茶山寺の落とし子とはいづれにか隠でも……」

わづか五六の句、しかし言ふに骨の折れた事は――
「無いことはおちやらぬ。窟子はもと鱗丸とて微笑庵――今は焼けました――てふ禪家に居たもので、その師僧が人に物がたつた事がれぢやつた。それがしもそれから聞きまひた。窟子は其處で生ひ立ちまひた」。

なる程、しらくしい嘘でも無ささうでした。が何うも慾が有たためかまだ腑には落ちませんでした。兎に角、それならそれで窟子に直々面會して、充分に尋ね

た上で無くしては分からぬ事、この思案はさすがに付きかけたもの、しかし猶も
た邪魔する言葉をまた主水助が言ひました。

「なれど、あゝ爲るくらゐならば假令兄弟にしるいちご姫の言葉聞き入れてもよ
うおぢやツた。なに、死んで榮紅がおぢやらうか？」

死んで？

「どは？」 圓く、目が。

「殺されまひた。」

「殺ッ！ いッ！」

「今から」、指を折つて見ました、「四月ばかりの前、あ、和君が此陣に御出でやつ
た日の朝でねぢやツた、此處過ぐる賣僧が有ッて……」

あゝ、聞くにも氣が急ぐ。

「賣僧、沙門の身として利器をおどころにして……あやしい者と認めて雑兵が射殺
しまひた。」

これもまた何うした事。やはり窟子に違ひなかつた！

主水助も愁傷の色を面に泛べ。

「知らぬ事とて見あやまつたのも詮無いこと、雑兵の罪でもおぢやらなんだ。沙門
の姿などして斥候するものゝある世の習ひが有れば言ふも愚痴ながら、それから
屍骸をあらためて見ておぢやらまひた見覚えの有る窟子でおぢやツたものを。」

「さては窟子は死にまひたか？」

われどわが聲に氣がつくほど聲は變はつて居ました。さどツたか、主水助……

「いたい御驚きでおぢやる、喃。」

で、微笑。それも心ない。どうして笑はれるところか。跳ね木にかけてしめら
れるやう、肉も血も一同にとろけて流れるやうでした。

第二十一

人は苦痛を受けるために此世に生まれて来たものか、快樂をかせいでは手ばたき
にして苦痛を買ひ、快樂を得やうと戀ひてがれてそれだけに無代でもまた苦痛を
買ふ、とんと譯はわかつたやうで、思へばまた分からぬもの。窟子をくぐるとの
念それ石にも矢は立つたと言ふに、まさか其石にひわれが出来て居たのでも無

かつたらうものを、この一念は益に立たぬのか、多分は木の股から生まれた窟子の胸にはどうしても立たず、あいや照覽の天津大御神、八百萬の神々たちの御目にもとまらず、何事か、ても死んだとは。もしろれが虚で無かつたことならば。こながらを樂しみに鹽鯉三片を竹の皮つゝみにして小脇にかへて家へ歸つて、見へはじめて狐に取られたやうな心持ち、之を馬鹿と言はふか、阿房と言はうか、こけと言はうか、たわけといはうか、しれ者といはうか、又は愚物と言はうか、和名抄をたづねても見當りさうも無い。

未の快樂を心でむさぼつた果て、死なれて何の甲斐が有らう。まさしくとした言葉、十が九までは嘘とも思はれぬもの、しかし最負心で辯護すればそれにし乙自分が自身で實否をたづねた上でも無いこと、礎松の芽がくの字になるのを神靈の仕業と言ふ下に八重瀬を見付ければ化けの皮は剥ぎとられる道理。

兎に角どうかいち手段で籠の鳥の不運をまぬかれて氣儘の身になつた上で其實否を正した上で思ひあきらめるなら諦めるともしたい、今さどられてはうれこそ大變、どうかして包み果せやう。

躍る胸をこゝぞと一心籠めて静める、うの間どうして居るか主水助をちらり睨めばいつもくその度わが眼も先方の目と鉢合はせ、が、變、どうも悟られたらしい。

鉢合はせする先方の目は戀ひに曇つたいろどりでした。面がまへから骨ふし、戀ひの「こ」の字も知りさうも無い人間ながら目は口よりも物をよく言ふ様子、こちらを見る体が兎角氣になりました。

何にせよ、此方の雅推かは知らぬもの、主水助は此方をいちごで悟つて、うして氣の有る様子、さて困り入りました。こ、術計はほとんど盡きました。先方は乗り地の体、ろろく坐をくづして、茶坐敷きに何の事、用も無いのに膝を進めて來ました。さア何を言ひ出すか知らん。

さすがに胸もはげしく躍り出しました。さしうつむいて、それで鋭く目をつかつて主水助の様子に心をつけて居る處へ——何、俄に物さわがしくなりました。陣が。

武具の響が爲る、と思ふ間もなく茶室へ駆け付けたのは雜兵でした。で、扨從

に言ふやうでした。

漏れ聞いていちごも仰天、無論頭人も。漏れたるの聲、

「敵……島山！」

「何ぢや、敵？」 坐を蹴つて主水助も立ちあがりました。

「敵でおぢやる。寄せまひた。」

「いかほぞ？」

「千騎ちかく？」

「たれの手か？」

「知れませぬ。」

その内にばらくいくらも駆け付けました。異口同音、

「するぞい騎足でれぢやる。」

「するぞい？」 主水助が。「物ども、それッ！」

手真似で鎧と知らせる間も無く——ばツとして猛火の光り——

「すは！ 火を掛け居つた。」

胸を投げ掛けたばかりでした。御免と言つただけをいちごへの援換として飛び出して、直ひとまづ立ち歸る氣。軍の様子を見に出れば、これはいかに敵は既に陣幕を研りやぶつて邪魔な物をば打ちこはす其するまじさ、まだく見たことも無い不覺を取りました。

「こは……もう」。開いた口だけ。氣が付いたのはいちごの事でした。逃げられるだらう。何と思つて氣にしたのか。

あわて、引く足、見て取る雜兵、

「無益ぢや、もう。頭どのが御引きやるッ！」

今はもう總くづれ、敵はますます、勢籠みまました。既に倒れかゝつた瀧、引きもどす腕は無くなりました。

で、いちごは……

あゝ、この俄さわざは天の賜でした。誰も念れて仕舞ひました、はじめ主水助が茶室を出る時、誰彼の區別なく威其跡からうつかり茶室を立ち出て仕舞つた、それにいちごも料らず便宜を得ました。今になつて思へば時服に着かへてあつた

のが思はしいやう、むしろ此さわぎ、鐘が望ましかつたです。が、敵は込み入る
氣はひ、たゆたふ内には幸福が裏を見せてまたも俘囚のはづかしめを受けるに決
つたこと、で、混雑に紛れて廣庭へ飛び出しました。

こゝには馳せちがふ味方ばかりでまだ敵はかゝらぬ體、直に逃げ路をさがした
ものゝ、生憎こゝは土塀のある庭で——しかし似氣ない勇氣も加はりました。足
にあたるものを傳手にして辛く土塀を這ひのぼつて、今はもう運だめし、さて血
路はと見まはせば、あら嬉しい！人のかゝらぬ小路が向ふへ付いて居ました。が、
既に逃げて行くものはちらほら。

火はすでに陣にかゝつたこと、元より板庇の假り屋づくり、瞬く間にひろがッ
て、嵐にさへ手傳はせて炎の飛ぶのは地獄も斯うかと思はれる計り、何が無し、
火の哮ける音と、劍戟の響きと、殺戮の陰き聲が一途になつて只凄まじく聞える
のみでした、戦場の實景と言へばいちごの後の記憶に残つたのは唯是だけ。

で、ろの餘の事は大抵夢中、たゞ運がよかつたと思ふながら不思議な心持ちが
するやうな、終に兎に角一里ばかりの遠くから後ろの火の手をふりかへる位な幸

福になりました。

けれど不知案内の道、何が何かさらに勝手は知れませんでした。足にまかせて
逃げたこと故、何處を経て来たことか、その記憶は皆無、聞は行く先の目的を
さへ封じて便宜を興へてくれるものも無くなりました。

今迄に思ひつかなかつた事、今日に至つて始めて人間の恐さを覺えました。陣
を出たばかりの一本路、もろとも同じ方角を向いて走るものは言ふまでも無い
同じ陣のものども、が、それさへ何となく恐いやう、まして敵などは！なるべく
人の無い處とのみ却つて望む氣になりました。今はなかなか禽獸は恐ろしくも無
くなりませんでした。

まづ見わたした限り人も走らぬ様子、心はやゝ落ち付きました。道端の木下間
をたよりに捨て石に腰をかけてつく／＼と思ふほど身は丸で夢でした。

「逃げてまづ嬉しかつた。こはい思ひをした丈の甲斐は有つて、それだけの償ひ
は有りました。既に悟られた身の上、只事では何うして主水助の手を逃れ得られ
やう。が、意外にも意外の合戦、あゝ何が仕合せになるものか。

まだ九仞の功が猶一莛をのこして居ました。今の場合ひは唯逃げただけ、逃げ果せたとはいまだく言へぬ、が、さすがに婦人だけ、逃げおぼせただけの満足を覚えませんでした。うれにしても主水助は生きたらうか、死んだらうかの考へは何を望むともなしに催しました。けれど胸を去らぬのは主水助から聞いた言葉でした。こゝは何といふどころか、聞きたい（今は人が懸ひしくなつたか）にも人はなし。いづれ人家も元有つた處らしいといふ譯は道端にこはれた材木や礎がまた残つて居たことでした。何といふ處か、夜、しかも月さへ無いゆゑ方角も知れず、何にしろ人家をさがして聞いて見やう。

立ちあがったものゝ、足の重みは俄に、れをろく程加はりました、氣の弛みが加へた重み、張りを強くしたらやがて直る事、われと我を獎まして道をひろふことも、もはや踊くやら、踏みかへすやら均は無く、で、二岐の追ひわけ路になつて、見れば右の道の方にも、また左にも遠くに各々人家が有るやうでした。人家もう懐しく、どちらと擇ぶといふ氣もなしに左の道へ志し目的の人家の門に立つて家の様子をつきのければ、この淋しい白屋に十五六の小娘一人居るやうでした。

氣もやゝ落ち付いて戸を叩いて案内を乞ひました。乞ひながら外から内の様子をうかゞへば矢張り間違ひもなく、娘一人しか居ぬ體、ふいと中では驚いた體で中腰になつて呆れ顔で門の方を見て居ました。

皮厚な田舎むすめとは誰が見ても推察出来る風、深夜人にたゞかれて如何にも仰天した體でした。

外ではまた叩く、内ではいよく氣味わるくなる、すかし見ては氣の毒にも覺ねました。

「喃、問ひまゐらす、こゝは何といふ處でかりやる？ それに湯一つほしきに無禮いたすのでありやる」。

聞き定めれば女の聲、しかし疑へばこの深夜に女が何うして。

「誰ぢや？」内から始めて黄ばんだ聲で。

「旅のものでありやる。こゝは何……」

と言つて戸に手をかけて居る内、戸のしまりが意外にも外れました。先方をおろかすのは氣の毒ながら背に腹は代へられず、偶然に開いたものをいゝしほに

していちごは門の中に入る、見て家の娘も化轉しました。叫び聲も出す、見れば武士、あら氣味のわるい。が、それを共にぞつと身にしみたのは武士の容色でした。うのあてやかさ、元より女子とも疑はれる程でした。

こはさ、氣味わるさ、しかし又見たさも見たさ、娘は家の中で立ちすくみになりました。

「こゝは何處わたりでおりやる？」

しかし直に返事は来ませんでした。ヒクとして、

「嵯峨野」。

「嵯峨野？」平家で聞いた瀧口の入道の事も思ひ出される、で、窟子の事も。嵯

峨野！昔から青道心の捨てどころ。が、考へは只それだけで眼前の利害のため

に横へ移りました。

「無禮な願事ではありやるが、湯をひとつ……水でも大事ありやらぬ」。

また娘からの挨拶は有りませんでした。けれど否みもせぬ鉢、古ぼけた器にぬるま湯を注いで出しました。

第二十二

白屋の娘とて只人すれぬだけの子供、待遇の疎末なのは別に深い理由の有るところでも無く、やがて色々いちごに話しかけられて些しは打ち解けても来ました。

が、いちごは女といふ事を此處でも隠して居ました。嵯峨野といへば思ひもつかぬ處へ来たこと、身を免れたのを幸ひとして、是から早く家へ歸る工夫も付けたく、そのために地理をいろいろ聞き合はせました。その間また不圖耳に止まつた事を聞きました。

かれこれの内、娘の老婆も歸つて来て、それからまづ泊まれといふ迄のしたしみになり、やがて一寸した話しの内に窟子のやうな人の居る處を聞いた事でした。

昔からの嵯峨野を青道心の捨てどころとしたとも偶然に思つた。そのいちごの空想も何か實らしくなりました。前にいちごが思ひ迷つた右の方の途に見えた人家がうの人の住處との事でした。

顔付きを聞けば麗はしいとの事、年齢を問へばかれ是廿歳との事、時をたづぬれば四ヶ月ばかり前から庵を結んで居るとの事、どうしても其人でした。召しつ

かふ僕も童もなく誰一人で行ひすまして居るとの事、折りくはこの老婆の家に
も来て自由に談笑して夜の更けるまで遊んで居ることも有るとの事で、それは何
うやら窟子と違つて居るやうでした。眞面目でばかり居る人かど問へば、老婆は
一も二も無く、かぶりを振りました。「さッちやありやらん、いたい面白い人や」
そんな話しをするかと言へば、佛くさいところは一切無く、何も角も俗人に違ひ
ないとの事、酒も飲めば肉も食べるとの事でした。老婆も葷酒が出家の方の禁制
と知らぬでも無い、それ故に何故道心のくせにそんな穢らはしいものを食べると
詰問した事も有つたとの事、さうしたら、貫くには素を養はなければならぬと、
何か言ひ脱けめいた事を言つたとの事でした。

さて窟子か知らん、他人か知らん。いちごは自分で自分を考へれば充分に窟子
の人となりを知つて居る心持ち、それで思へば窟子はとうしてもそんな得手勝手
な事をするものとも思はれませんでした。が、氣にもかゝりました。何にしる、
尋ねて見たが大丈夫で、好い加減に言ひくろめて其夜は其處へとまりました。白
家のことゆゑ家は一間しか無い、老婆と娘といちご三人枕をならべて雑魚縁を

しました。さまざま、な物思ひでいちごは眠られず、それで聞き付けました、何故
か、溜め息のみ多く爲る娘の氣はいを。

第二十三

あくる朝は朝日が匂やかに出ました。初春の景色、どこに何うといふ事は無い
もの、猶零落の身にも心よく思はれました。零落にしろ危なく災難の處をいちご
も逃れた、その嬉しさは流石に今でも消え失せず、猶何となく心をいさませまし
た。ことに昨夜聞いた不思議な人、その人を是から尋ねるといふ楽しみも有り口
から出まかせにつくるつて白屋の老婆から婦人衣を借り、自分も併心の有るもの、
それ故にしみく、其沙門と話してもして見たく、そのため女姿に打扮つてうの庵を
尋ね、道心をとめてやらうとの言ひ草でした。

娘の一枚着の晴れ装束をねだりだして——田舎ものはさて質朴なもの——また
貸して、そのかはりいちごは刀を着て居る衣服をば預けて置きました。手づく
りの二葉松の表着に取つて置ききの市女笠、兎に角花も禁苑に入れば匂ふとか、打
ッて付けの粧ひも出来ました。「あつばれ女子でありやる」と眞面目で言ふ老婆の

心の程も我ながらいちごはをかしいやう、見惚れて口を開く娘の迷ひも可愛らしいやうでした。

白屋を出て、教へられたまゝの道を過ぎて例の庵室へ行き着いて見ればなるほど物がたりにも有りさうな體でした。

もと住んだ人は誰か、素より是れを目を付ける程でも無い家づくりではあるものゝ、猶こゝが庵室かと思へば、見る物が只何となく俗とは違つて居ました。行く途すがら何の氣なしに梅を折つて玩んで手にたづさへて居ました。が、こゝに至つてふと湧いた思案が出ました。

家の主は誰かわからず、見とほした處、背中だけを見せて頭をば障子の蔭にうづめ、經机に向つて居るのがすなはち例のその人か？

「喃、たのみまゐらす」。
中の人はいふかへりもせぬ、では今が行の最中か知らん、それとも禪僧がよく爲る俗おどしか知ん。こゝろみやう。
主水助が言つた、窟子が殺されたといふ事も一理あるやうに聞えるものゝ、さ

てどうやら信けられぬこと、大抵は左様あるまいと信ずるものと、また此處に居るのが窟子かどうかは疑はしい限りでした。音信れてこゝへ来たのはほんの念ばらしのためばかり、白屋の老婆から聞いても何やら人は違つて居るとしか思はれぬ、萬一さうで無く人違ひで無かつたにしろ、眞の窟子なら並大抵の手段ではおそれと云つて逢はぬのは知れた事、むしろ手をかへて此方から名乗る方が荒膽をひじやかも知れず……

「喃、たのみまゐらす。これは茶山寺のいちごといふ者でおりやる。うけたまはりたい事あつて参りました」。

と云つて、中のものが窟子なら決してありかへるまい、窟子で無ければ怪しんでありかへる譯。如何にも窟子で無いにしろ、行のために動せず居るかも知れぬものゝ、それならそれで別に試る手段も有ること。

が、窟子か知らん、ありかへりませんでした。
案の如くありかへらぬとしてもさて其處で考へが付くと云ふ譯でもなしたと義理で責めるのが上策。

「喃、窟子どので在しませう。名をいつはり、形をかへて見参するを知らぬ身ではありやらねど、さて事々しく名の心根御さとりやれ。今日勤行の御さまたげならば今日には限りませぬ。幸のこの梅の一枝、この垣に挟み置きます程に、明日また重ねてまゐりませう。御心あらば其時までこの梅を取り捨てずに御置きやれ」。

哀れにも風流にかきくをいて、深くは怨みも述べずに心を抑へて立ちかへらうにしました。さて思へばよくくの心底、中のものは誰あらう、やはり紛れも無い窟子ではあつたので、かきくよく言葉の切なさ、今までになく胸に浸みしました。で、いちごも空しく立ちかへる思ひ入れに入る程間ちがひも無く、庵の主は窟子どの鑑定は付きました。さア明日、明日がうの境、あれ程に言つたからには些しは聞き入れたらう。多分明日はあのみ垣根に梅をさして置くことだらう。どの樂しみにあつたから心もいそぐしました。が、今のいちごは昨日のいちごで無く、多少昨日のいちごの煩惱をば持つても居ましたが、猶うれより猶重い望みが俄に心に湧いたのでした、昨日主水助から聞いた窟子どいちごが兄弟である

どかい事、よく問ひ明らかめて、そして品によつたらうの誼から窟子を味方にして——あ、他人は他人の心を知らず——あわよくば足利に怨みの刃を一刀刀まゝろみたいといふ、その方に日頃の鬱憤が一入までもよほしたからです。

明白の事が早胸につかへて、貧乏が大晦日を待つやう、くるしいやうな處に新年の樂しみも伴つて来る心持ちでした。口はよく利き得ぬながらいつもいつも恥かしさうにして世話をしてくれる白屋の娘のあたゝかい待遇も更に心には注まらず、明日ばかりが遅くしか思はれませんでした。

待たずとも暮れる日がいちごには待たれてやうやく暮れて、さて明くる朝がゆるく來ました。いさ今朝となれば、さながら物馴れぬ田舎女が宮中の歌あはせにでも出るやうな氣もち、思ひ出しては胸も躍りました。

何か言ひつくりつてさてまた勢よく白屋を出しました。途は宙に浮いたやう、身には羽でも生へたやう、早く庵に近づきました。

目指すものは例の梅の折り枝、目のあやまりか、不思議無いやう、是はと胸はまた些し躍る、近づいてよくよく見ても、あら無情、何も無し……

もはや失望と怒りとに燃ゆる目、を放つて四方を見れば、無残、その梅はなまじひに物思はせ顔、半ばから折られて些し離れた道に落ちて居ました。

人が心をこめた梅、それを構はず無残にも——さてわれ／＼二人に或は骨肉のよしみが有るといふことをも知らぬのか、惚れたのか、それとも知らず顔するか。たゞ、否なら否で、たゞ捨てたがよからう物を、半分から折つて捨てるとは！それが佛につかへる人の心か。

屹とにらんで立ち寄る扉、力が有つたらひしつてなりと。で、見れば、障子から、己れ半面を現して此方を見たのは窟子——さあ怒りは混み、混み、上げて来ました。

第二十四

にくらしくなつた物を今はじめていちごも憎らしいと思ひました。これ程の心根を——人！とこまで聖人めかす？

はじめ疑つたものゝ、求めて見ればたしかに窟子、その者が葦酒の禁をさへ守れぬくせに、生意氣な、女性を忌みきらふとは。

でも白屋の老婆の處へは遊びに行くとか、老若その類が殊なつて居るにしろ、矢張女は女、乳を出して子を孕んだことも有つた人間。いや／＼、孕んだ子、その子、それとて娘、田舎むすめにしろ既に妙齡、それを、馬鹿々々しい——本の聖人なら見向もしまいのを——尋ねて馬鹿ばなしをさへするといふ癖に。

なせ左様うとむのだらう。只の女性と思つて疎むとは何うも思はれずさうかどて兄弟と知つて居る事なら猶うとみもせまいものを。不思議でした、さう考へても當てはつきませんでした。

その癖によくもさう人を冷かしたい事、半面をあらはして此方を見てもいゝ氣味と言はぬばかりに眺める、おのれ、何うして呉れやう。

「いちご御？」

何を、おのれ呼びよめたのか？ 此方からこそ呼ばれずとも言ひたい恨みは雲山有る。

「聞く耳もたぬいちごでありやれど、言ふ口はありやる」。罪の無い垣根も小にツくらしい、こじれば脆くも開く、つと中へ入る、窟子は

出むかへて、

「いざ、こなたへ。」

白々しい、まだく人を愚弄する。

燵のかたはらに荒々しく座を占めました。舉動の荒々しさに何か魂を消したらしい窟子の顔色。

「窟子の、口惜しむ一杯の氣をこめて、」窟子の、最後でありやる、これが。なッせ、梅を……御心に染ますば染ますで怪しうありやらぬ。口で申されても、やよ口で辭まれても大事ありやるまい。さるを、梅を……「うらら御心に……」とぼけた顔の窟子、「何でおぢやる。はじめから某には會得なれませぬ。」

「會得！なに、これを。梅……梅をなにゆゑ折ッて御捨てやッたか？」梅を？ 和御前の梅で？ これはいかに某は……

「御捨てやらぬぞか？ 何を……見る前に折り捨てやッたは……」

「は、それでおぢやるか？ うれはく。」

「うれはくとは何事でありやる？」

いよく詰めよる一心、うれを冷笑でゆるく迎へ、

「全くそれがしではおぢやらぬ。」

「誰でありやる、和君でなくば？」

「わらべでおぢやる。すまじに、澄まし切ッて、

「こゝらあたりの里の幼童が仕業でたぢやる。今朝此處通りがてに昨日のまゝなる梅を見て、愛でたでおぢやらう、取り行いて玩んで、折り捨て居ました。」

海は暴れても川は静といふ落ち付き方、突ッかッた身が中々烟にまかれました。

「わらべが玩……んで？」

「それを和君は知ろしめして？……」

「もとよ、見て居りまひた。見たれど、其儘にして置きまひた、うれがしが取り捨てたにもあらぬ物を、疑はれる筋もたぢやらねば。」

あゝ脱俗、そこまで平氣でかまへるのか？ そして笑ひもせず、可笑しくも不思議でも何でも無いと言ふ顔付き。に、吞まれて今は青菜に鹽——そゝるわが身

の麓急が恥かしく、

「さる事でありやッたか？ とは知らず。さらば和君は、今日……妾がまゐるを御疎みもやらで？」

「なか／＼」。

いよく恥かしく、「あゝ婦人は心のせまいもの」と思ふ、思ふだけに日頃の男を尙ふ心もまた嫌になりました。

どなると思議なもの、口が何やら利きにくく、言に言はれぬ威に撲たれるやう、今さら思ひ込んで来たことも差しひかへたくなくなりました。が、手持ち不沙汰にして居てもまた蔑まれる譯、免に角言ッて飾りたい心もしました。

何用で来たと言はぬばかりに同じく黙ッてかまへて居る窟子の體、問はれぬ先きに早く打ち出したいもの。

遠まはしに、先方からも問はれぬもの、其以來受けた艱難辛苦をつまびらかに語る、語れば其内に口も馴れてさし支へなく言へるやうになるもの、唯氣の無いのは窟子の様子——挨拶だけをしてくよく聞いて居てはくれて居ながら、うれ

でさッぱり氣の乗らぬ様。

かたり進んでさで窟子の一身にろろく移ッて、こゝに遁世した子細を、思ひ切ッて打ち出して尋ねれば案外、答へはこれでした。

「この方が心やすうおぢやれば」。

何を言ッてもそれより外言はぬ、問へば問ふだけで同じ事より外くりかへさぬ蛇の生をろし、面にくくも有る程でした。素生を窟子は自身よく知ッて居る事と思ッて尋ねてもそれも無駄、知りさうも無い體でした。分かり切つた事を探ねて主水助を知つて居るかど問はるれば知ッて居ると答へました。

事を成す鳥は多く飛ばぬとか、生仙人に限ッて俗おとしを爲るもの、窟子も事によつたなら左様かも知れず、何にしる、折角聞くに、大聖めかして些しも應せぬところは或は其邊が有るのでは無いか。いろいろに索引いて、或は遠くから、或は近くから差しつめ、引き詰め、其心を見る、見るに従ッて折角思ひこんだよけの張り合も無くなりました。

事によつたら窟子を一味にして例の勤王の妄念を實地に行ッても見やうと思ッ

た、夫も無駄でした。何を言ッても窟子は深く取り合ひもせず、何のいちごが主水助から聞いたこと、或は兄弟か知れぬといふ事まで説き付けて見ても皆無駄目でした。

問ひながら種々に考へて見る。見ても八幡の籤、どうしても迷ふのみでした。兄弟と名のり合ッたことなら何も兎や角の煩惱はなしは無くなるまい鬱陶しくも無からう。それを、兄弟と名のりもせず、それかと言ッて、何を目的に道心となッたかも知らせずに居るとはかへすく不思議のいたり。

あるひは窟子が道心を起したといふのは別に子細の有る事かとも思はれました。道心といふくせに髪をも剃りてぼたす、また袈裟をも纏はず、わづかに胸高の中ぐけ帯にその體を言ひ譯だけとしか見えぬばかりに狂ふ、どうしても變化、並の人間とは思はれぬ程でした。

とても無駄とまでにいちごも思ひ付きました。が、怒がまだく手傳ひました。無駄と思ひ付きながら、或はその思案も躊躇させるために折りくちよいくと首を出し、さアどちらかとも迷ふ、迷へば迷ふてまた窟子が高く、左様とまッ

て居るのが並々ならず思はれました。も一度と心を引いて見ると窟子は矢張り同じ考へでした。考へも考へ、いよく出れば出るほど憎らしい考へでした。

公卿がおそろへたのは前に榮えたむくひだけの事、さかえたのが理でも無ければ衰へたのが理でも無い譯、これを冷淡といふかも知れぬもの、是を冷淡と思ふのは其人の心得ちがひ、依怙の熱に心を焦がし、目をくらま、た其考へで見れば公平はみな冷淡となるといふだけでした。

義政を殺さうかとの言ひ出しも一搏ちにつぶされました。義政が亡びたら天下の勢が必ず公卿のものになるとの見こみかたしかに立つ事かど冷かされました。

しかし世は依怙、偏頗、私慾、得手勝手で出来て居るもの、其局にあつては勝手に事をするがよし、義政を殺すとも、活かすとも勝手次第、公平な、公私無差別の心からはどうしても嘲るよりほか仕方は無いと言ッて笑はれました。

禪を修めた故かう取りとめの無い處を言ふのでは無い。禪は學んだ。禪の趣意には服した。が體裁には服さぬ。坐禪も否、悟道めかすのも否、たゞ一理を知れ

ほどのみ思ふ身分、言ふだけは眞實を表にして眞實を裏にもしたい所存、決断が鈍さうにも見えやうが、作らぬ決断を自分望む、決して禪の悟道めかして言ふのでは無いと奇麗に取りなすやうな、又取りなすぬ事を言ひました。

さうかと思ふと、また公卿の方のものにも大偏頗が有ると言ッて冷笑しました。いちごを馬鹿、偏頗と言はぬばかりにこなしました。終に、あら！この口達者が！

「よしなく男めかすは片はら痛うかりやる」。

何を言ふかと思へば、結局は人を——言葉にさへあらはして、斯うまで！

何の、さう辱かしめられるいは 無い。ある今までの煩惱を見てあなとられたのか。

我慢に我慢した果ては氣も逆上しました。これと攪みかゝりも爲たくなりました。とッ……どうして呉れやう。「男めかすは片はら痛い」と言ひくさった。

たゞなら腹も立たぬ、公卿と散々くさし果てた揚げ句、地下が物をも知らぬ亂言、もうく戀ひも何も醒め果てた。

人を「男めかすは片はら痛い」と言ひくさった。「男めかすが片はら痛い」か痛くないか覺えて居る。

不斷から親にも言はれた身の短氣、また利かぬ氣から辱かしめられて黙ッて居られやうか。これのやうな畜生とは知らず、畜生、大義を知らぬ人非人とも知らず、今が今まで——あゝ女は淺ましい——めづらしい男と思ひこんで居た

のが過ちであつたのか！何も辱かしめずともいゝ、否なら否で不同意を言へばいゝ、思へばく梅を折つたのもやはりの分からずや——これ、富子の仕業、それを小供にかこつけくさる。それで悟道か、達識か。たとへ千萬人の臟腑を集めても沸えくりかへるこの無念は詰められぬ、ても、何うしたら！

是も何も宮方の零落から來たこと、今はもう鼻も掛けるものか、思ひ込みに思ひ込んだ怨みは掛けやう。どうかして。

相手はしかし落ちついたもの、さかだつ柳眉にあしらひ顔の微笑、微笑で——「さまでに深く思ひ立てた？ 御一念はこの胸にも染みしました。」あゝ斯うも女、いや、哲女は男に玩ばれるものか知らん！

第二十五

席を蹴立て、庵室を立ち出て、考へれば浮き世の味もはじめて知れました。浮き世の味が知れたといふ、うれがるもく迷ひで有るか無いかは知れぬもの、世の中の男の怖ろしさが始めて分かりました。ひるがへって我身の昔の空想に思ひ至れば、われと我身で人畜の區別も無くなりました。あゝく煩惱に驅られたツけ。

もうく今度といふ今度は思ひ切った。それにしても憎くい窟子、思はせぶりな昨日に引きかへた今日の始末、あれ程義政を最負する（と思ひ込みました）かには打ち明かした今までの事を知らせるに違ひ無い。

あゝ思ひ凝つてもたしかな分別も無くなりました。

むらくと萌した出来で、ろ、根が活氣の婦人、おのれ、やれ、その寐……寐

首を……

殺してやれ！

心が心すべて雷同しました。

むかし大罪人が死刑になる時、「罪を犯したはじめは些細な事であつた」と言つたさうな、それと同じいちでの境遇でした。一念が一旦偏頗にうごけばますます偏頗に動く、活動する、はたらく、實に奮つてはたらく、邪念？妄念？それとも正理？罪惡は、あら知らぬ間に人をたぶらかすもの！

目を付けて置いた窟子の守護刀、よく覺て居る、あの經机の横にあつた――

あの刀で一糸ぐりに……もうもう破れかぶれ。

何のために作られた身體とほとく問ひたいやうでした。

今はなかく白屋へ歸るのは氣が進まず、物思ひに蝕れて近邊を徘徊してやうやく夜となりました。

いざやがてとなれば氣も急ぎ立つ、ひとり淋しいところに選いて心を練つて度胸を据ゑ、夜を更かしました。

星影は美事に研えて、夜寒の風は肌に染ました。道ばたにある梅は暗香を此世の名残りと言ふ氣で冷かに送りました。梅津の里の春風にこの香を覗いだ横笛も

やはり嵯峨野に現世の運命を悟ったとか、悟れぬ此身の附甲斐なさ、それも何も、何が無し、たゞく口惜しい。

忍び込んで様子を伺へば、雨戸がすこし明いて居ました。幸と忍び入る、中は開、そして勝手知った燼の邊へ抜き足差し足。

手を伸べてかいたる、手先きに觸れた經机、すはと周囲を撫で、見ました。が、身に着けたと見えて守護刀は有りませんでした。

更にかいたる手先き、おやッ！ 人！
おのれ、窟子！ しかし、あゝく發念、まだ利器を持たず……

覺めたか、先方は此方の手先きを引摺ひ、ふりほどく、で、悟ったのか先方、
「これは婦人か？」

肌ざはりで婦人と悟られたのか。しかし不思議先方は盗人とも言はず、無言で組み布かうと閃き出しました。もう、事は破れたか。

組み布かれました。が、これは如何に相手は無言で人を組み布いたまゝ、揉接いても、あばれても起こしもせず、組み布いたまゝ、これは意外、煩惱の犬――

何として窟子がろんな劣情！

しばらくして上の男は組み布いたまゝ、いちごの耳に呟きました。
「和御前は盗人と見たれど、婦人ゆゑに坐せ、ろも起つた。何を隠さう、それがしも同じ盗びとぢや。隠形と忍術とには巧者の名も取つたものぢや。如何にもう斯うなれば夫婦ておぢやらう。御身も素生うち明けて是より打ち揃ふて事を御しやれな。」

奇怪な事を、何、盗人？ では窟子はあの盗人か？ ても、まア！
絶え入るばかりの驚きでした。不覺、盗人に身を汚されたか、この盗人に。さア夢とも現とも今さら分がなくなりました。

はじめ窟子を戀ひ慕つた頃には唯一個の美丈夫とのみ思つて追つた、もし盗人と知つたなら何をどうして仇心を起さうか。で、今日は弾かれた。弾かれて、来て、誰とも知らぬ婦人のふりて入つて見れば此通りの始末、如何にもく何うやらどの疑ひも残らず晴れた、窟子の心根も知れた。

奇に走って奇を弄されたといふやうな境遇、何が幸不幸か分からぬ程でした。上の男のさゝやきにつれて胸は千萬の思ひに湧きかへりました。思ひ切つて心中の心中を言へば、根が姪婦といふだけに身を汚されたのをば深く心に其實くやしかりませんでした、むしろ僥倖で窟子に逢つたのが切めての念晴らしのやうでした。ことに相手が盗人と現かしたのみならず、隠形忍術に巧者と明らかに言つたのが氣に入りました。盗人と明かしたからには最う理義を言ひ立ても爲まいし、また隠形忍術に長けて居れば足利の窠所へ忍び入って其窠首ぐらゐ掻くのも大方譯の無い事と考へました。唯なら素生の知れぬ盗人に勝手な熱を吹かれてどうして黙つて居られるもの。が、今のいちごの場合には反對でした。一旦は残念にも思ふ、が、残念を思ひ返しました。中心に固有の多情と動王の心とが相集まつて普通に世がみとめる耻辱や不愉快をば屑ともせず實にいちごが魔界に墮落するはじめは此處にありました。ならば盗人になつて見やうか。始めてこの陋しい考へが萌しました。亂雑の世

の中に獨立獨行すこしも不正を行はぬからと言つて何の利も無い事、佛者でさへ破邪顯正のためには手荒い手段をも爲るといふのに。ぬれぬ先きころ露をもいとへ、毒を食はし皿まで甜れ！臍の緒切つてからまゝに始めて男——はじめ思つて後思はなくなつた男——に逢つては善惡無差別に——劣の劣、陋の陋——非理に染められて、むしろ人界のいはゆる恥辱が時に取つての仕合はせとも思はれました。やうやくに心を落ち着けて、いちごはわが身は矢張りいちごを明かす、明かして先方は驚いたやう、如何にも驚くのも道理、が、何故か晝間の事を口くされ首ひ出しもしませんでした。それで思ふ仔細も有り、ゆるくとも語りたいたいゆゑ、一先こゝをば早く落ちやうといふ男の言葉でした。籠絡されては最う自由にされるもので一も二も無いいちごも承知して直に身づくろひして逃げ出しました。何處を目的に？ たゞ男の向くまゝ。直ばしりに走って可なりの道を歩いて來ました。そろく高くなつた男の聲、

今までは嚇きでしたがもう安心と思つたか、並の調子で物を言ふ男の様子その聲からに不圖氣が付けば、をかしい、窟子では無いやうでした。

不審千萬、正に窟子と思つたに。聞き定めれば聞き定める程如何にも變、こらへかねて、

「御身の名は？」

「名？ いちと、和女も御知りやる。」

「たれぞので？」

「大幸ぢや。主水助ぢや。」

あら？ 主水助！ さアこの仰天、何のまア重ねく、主水助か、本當に。ま、

どうしたら——あら氣が付かなかつた。

それにしても泣きて居たのか！

「いちと御、それがしも斯う生きておぢやる。これも何も習ひ覺えた隠形の方で、火の中をぬけて逃げまひた。御身もよう恙なかつた。それがしは知らじと思し召しつらうが、御身が如何にかくしても某しは御身の素生を其頃も知つてであつた。



取りにがした無念のまだ消ぬ間、そもく如何な天運、かう妹背となつたとは！

幸か、不幸か、實は窟子は夜中過ぐる頃不圖目を覺まして、外をそとるあるき爲たくなり、飄然として家を立ち出でた、その留守へ主水助が落人になつて来て、窟子の庵ども知らず潜んで居て、偶然いちごに出逢つたのでした。神ならぬ身の窟子がどうして留守の間のそれら珍事を知らうもの。星清く、静な夜色、闇はまだ篝火にやぶられぬ平和な天地、見るまゝに興に入つてふらくとして来る、その道に二人の、夜目にも見える、男女——實はいちごど主水助——とに逢ひました。が、顔も見えぬ事とて、殘念、心もつかず、をかした男女と思つたまゝで、しかも袖をすり合はせて行き過ぎて、無心で家に歸りました。

燈火をつけて見れば前後狼籍。鏝子もふみつふされ、爐の灰も蹴揚げられてありました。さすがに化轉して思案皆無、目を見張つて無言で四邊を隈なく見まはす、其處に見當つたのは一つの刀の目釘でした。

目釘は袴の實で、あまり世に少い形、見ると思ひ付く事も有りました。一度誰

かの持ち物で見た事の有った心持ちでした。誰か彼かと思ひ込んでも中々思ひ付かず、やうやくの事で「たしか主水助の刀に」とだけは分かりました。が、それにしろ主水助が留守に來たとは何うして思ひ付かうもの。目釘の來歴は分からぬ儘猶考へる事として庭口へ立ち出で其邊をよく見回せば例の市女笠が隅の方にありました。たしかに見覚えのある、いちごの市女笠でした。

第二十六

世の數奇、とくに運や命は有ものか？ 思ふに造化は奇を弄して始終世界をなふるもの、こゝに思ひを徹させずに先方に思ひをよほさせる、それを上から離れて見れば事の成否はたゞ處を變へただけ、右が左となつただけ。が、下から一方に偏頗の目を注げば、おのづからその配劑が怨めしくもまた妬しくもなる處で思へば、人情の喜愛はまるで造化に關係の無いことか？ 血を筆にあくませて伯夷傳に天道をかきくさいた選の度量もさて思へば小さいもの。

ならばいちごは悟りの奥をつきぬけた達識か？ 決して天をも怨みませんでしたが、また悲しむりませんでした。一方に於て浮き世の耻辱を何とも思はせぬ多

情といふ物が扣へて居て、一方に於て類の無い血氣が手續なしに暴れました。

今のいちごは心に主宰の無いものでした。主宰有りました。が、新でした。一歩あやまれば魔界に墮落させる多情と勤王とが良心を埋めて居ました。

世の男子を尙みずると同時、身の非凡を鼻にかけて終によく泳ぐものが水に溺れました。世の中は狂波暴風の中に實は真如の光りも消え消えて天地ほとんど晦冥、そこに獲物を待ち望んで情の腮を張り、怒の牙を噛み鳴らして扣へて居る大魚の有るものと思はず、わが非凡、わが地位の兎に角やすらかな處によつて宇宙を覗いた果ては終に今日の境遇となりました。爲つた、それで悟れば猶よるしい、が一度藍に落ちた糸はたやすく白には返らぬ比へ、吐き出されかゝつては川口で船も止められませんでした、實に止まりませんでした。

かよわい、はかない、實はづかしい事ながら人間の妄念は大かた是、鳥兎すれば啄むの古哲の言葉をうりになりました。

いちごは主水助と表立つての夫婦になりました！ 陣をうしなつて逃げた事、とても主水助が主君にあはせる面は無い、無いでは食へぬ、つひ人のものを唯取

る風も付きました。
 心よわい婦人の身ながら流石にいちごもまだ志しの奥をば打ち明けず、いつか折りを見て其隠形の奇特を得やうと思ひ込んで居ました。夜寐ものがたりに掻き口説いて聞く、しかし、主水助は事にかこつけて教へませんでした。
 都には殺氣が充満して居るものゝ猶人の來往も繁くて大方かせぎも出来る事とて二人は都へ移つて厚かましくも家を結びました。此頃兵亂が少なくなつたものゝ、猶多少は有る事、それながら山里の片田舎より生計が自由なためか、處々の野原へはちらほら家も立ちました。素より陣營の用に供するための商人ばかりが多く集まつて、見世店にさらしたものは重に武具食物の類、それどころに奇怪と思はれたのは其商家の中の大きな家では顔立ちのうるはしい婦人を雇つて多分はかどわかして、兵士の伽とさせました。あれさびて淋しいながら猶凡ろ陣屋の用となるものは一切また集まつて、いづれも康い命を一錢二錢の代に掛けて居ました。はやりの廢らぬのは太平記よみ、はやり出したのは笛や其他の鳴り物、琵琶法師などを毎度陣々の最負になりました。

この處へいちごが舞ひ込んで來たのは人の目のつく種でした。何を商買ともなしに賤が屋を結んで暮らす處へ、武士も折りく腰なぞ掛ける、粉飾を廢しても流石に花は花のいちごの國色、ことに管絃にも心得があるとの事、見るのがいろくの評判の基、諸處の陣へも呼ばれるやうになりました。いよくいちごが魔界に墮落する一歩一歩が進みました。

呼ばれて伽に出れば金がまうかる、儲けて歸つても主水助には其得た金を残らすはわたさず、何につかふか自分の勝手にしました。はじめは主水助も忍んで黙つて居ましたが、根が嫉妬心にも深い質、いくら稼ぎだからとていちごが諸方の陣へ出入りするのには快くも思はなかつた處へ、いちごのこの振舞ひ、終には夫婦いさかいを爲るやうにもなりました。夫婦いさかい、それも慣れぬ内は珍らしくて、双方にも感じが深く、したがって其はじまるのにもいづらか支度が有りましたが、多く有るに従つて目にも立たず、果ては三日に一度ぐらゐは是非爲ぬとすこし間が抜けていくぢ無いやうな心持ちもして、言葉だゝかひを爲るやうに爲りました。

互に否と思はぬからこそ喧嘩もはじまるもの、がそれは初心の内、終にはそれが根になつて愛から生まれぬ喧嘩が終には憎みから起る喧嘩となりました。喧嘩した果ては姫も全くの山の神、近處の内方から柴賣り、相手を擇まずに夫の讒訴いよくそれが主水助の火の手をも強くしました。

「隠形とやら教へて賜はつたなら、教へてくれたら中よく暮らさうとの律義な問ひでした。術も何もそんな事をば元より更に知らぬ主水助の事、辭を左右に托す托せば托すほよいちごの愛はますく、秘め行く、面白くない世となりました。

ある夜また喧嘩がはじまりました。原因は何か、双方とも非常に激した語氣で

「身に應せぬ妻を持ちながら……」 是はいちごが言ひました。

「身に應せぬ？ 何を！ おれとて舊はあつばれ一手の頭人ぢや。公家の秘め小袖が何ほどの……」 是は主水助が言ひました。

互に負けず劣らず争ふた末、泣きながらいちごは家を飛び出しました、さも身でも投げて死ぬとでも言ふ体で。が、言葉の進退づく、四本棒なら知らぬ事、二

本棒ぐらゐでは追ひ駈けて止めも出来ぬわけ、言ひ争ひながらも流石に主水助も心配、うの心配を愚痴にかへてひとり咳くのみ、後を追つて出られませんでした。いちごが出てから小半時経たぬ間、主水助はさうしても堪らなくなりました。むしやくしやと頭一掴に上る血、目もくらむばかりに爲つてつよいて家を飛び出したのは夜の丑過ぐる頃、一面にきらめく星影もすさまじく見えました。

さうしてくれやう。思へばく見かけにも似ぬ臍ふとい婦人、それでこそ鎧打扮ちで男のふりまで爲た。見つけたら何うしてやう。ぎづくを食はせて、ぶツちめて？ いゝや、それだと又怒まれる。

それとも女ごけに氣が狭く——さア死にでもされては事だ。五十年來兵馬の間を奔走して定まつた妻をも持たず、行く先きくで氣に入つた女をわが物にしたが、まだくいちごのやうな美人には遇つた事も無い。それを打ち捨て、しまふのも残念のいたり。

見付けたら強面で威して、とてろくくやさしくして、思と威をふたつながら行つてやう、降参の武士を従へるのもそれが手、いつかもういちごにそれを行つ

た、その手で行かう。

もし晝間見たなら大方血まなこ。其處此處となく尋ねましたが、さらに分
ず。分からぬまゝいつかいつか名も知れぬ人里の無ひ焼け野に來かゝつて聞けば
さア大變、女の泣き聲がしました、しかもくるしむ聲、

胸をつきり、氣も半亂、耳を引き立て、聲の有る方へと進めば、いよく大變
水！ 池！ 池から聲が來ました。

「身を投げつらう！」

よもやの疑ひも俄に固まつて、うれと同時に無量の心配。

無情な水はかき立てられてか、じやぶくと音がして、

「めッ苦しむかッ！」

星あかりに透かし見ればはたして肌白の婦人、

「やア主水ぢや。今助ける。待て。」

着物を脱ぐ間もほとんを無く水けふりを立て、飛び込んで、くるしむ婦人を小
脇にしつかり抱きこめば、はや弱つたか、ぐたくとしてその重みさへ非常でし

た。

「心な落とし。大事無い。」

扶け揚げて見ればまだ氣の絶える程でも無いと見えて、疲れてはゐながら猶し
つかりして居ました。

「いちご、これ、主水助ぢや。」

それに應じた聲がらを聞けば、不思議、ちと……

「いちご……ぢや、これ？」すかし眺めて。

「わらはは葵と。女が。」

「葵？」

「葵。」

「いちごで無うて？葵？」さア驚いた。狗骨、くたひれ儲け。

推量に過ぎた失策を悔ゆると同時に、思々しむと口惜しむとが一時に混み上げま
した。一度すくひあげたものながら、愁ふたゝび突き落としてもやりたし、
「いちごぢや無い？」わかたつた事をまたふたゝび。

「いちご？」むかふも亦驚いた聲からでした。

「いちご？ いちごとは茶山寺の？」

「なか／＼。これは、御知りやる？」

「知る…妾の知り人でありやる。」

主水助も思ひあたりました。

「さらば御身は官方で？」

「なか／＼。」

どは答へましたか、何故か俄にもよほす涙

「これは御泣きやる？」

「くッ…くッちをしうありやる。いちご…いちごが仇で、かたきで。」

「かたきとは何でぢややる。それがしは、今は何を匿さう、いちごに太い忍みがあるに、さても扱も和女もまた。」

「ありやる、怨みが？ 怨みが、刀禰？ わらはも、わらはも、御聞きやれ、い

ちごに此處へ突き落とされました。」

いよく／＼出で、いよく／＼奇怪な言葉。よく／＼聞き買せば斯うでした。

其夜葵が此邊を歩いて居ると、料らず道端で男女のさよめきが聞えました。も

のめづらしさに小蔭に忍んでよく聞けば正に分かりました、女はいちごで、

何を言ふかと思へば、さア、主水助には意外の、意外の、意外、いちごが男に頼

んで主水助を殺してくれろと言つて居たとの事でした。

葵の言葉によれば、其男は年若の武士で、應答の摸様、うたがひも無いいちご

の情夫、いちごが泣きながら主水助の非情を訴へると、しきりに慰めて居た擧げ

句、終に斯う言つたとの事でした。

「主水を殺せば日本一、和女どそれがしと誰はかかる事なく夫婦とはなれう。こ

よひ曙方に忍び入つて美ん事ろれがしが主水の首を擧げうす。」

聞く身のおどろきと言つたら！

ふたゝび葵は語りつぎました。

それから葵がつひこらへ切れず運わるく物かげで咳をした、それがいちごたち

の耳に入つたと見えて二人はすはと身がまへして、窺つて、そして葵を見るより早くいちごが飛んで来て池へ突き落とされたとの事でした。で、落とされて苦しむ體を二人並んで眺めて居る内に人が来る體を見て何かうなづき合つて逃げたこの事でした。

嗚呼、嗚呼、して見れば主水助が其處へ来た、うの時までも、ても發念、二人は其處に居たことか？

遠くは行くまひ。追ひかけたら。すでに今夜こゝろすと言つて狙はれて居るものが、どうして家に歸られやう。

が、何處を見當てに追ひ蒐けていゝものか。ことに男が猿首をかきに来る時、いちごは何處に居る事か知らん。

「いちごは何處で待ち設けるぞ？」

聞いても是は葵にも不確でした。手がうりが無い。どころでさア何うしていゝか分かならくなりました。が、流石に眼地をも經て来たもの、大膽に決心しました。

「家へ歸らうぞ」。

歸つて物かげに忍んで居て、やがて来たものを待ち付けて狙撃して——その跡はいちごを捜し出すこと。思ふに大抵は男と一途にいちごも来るに違ひ無い。敵の不意に出ればよしや其ものが鬼神をあざむく剛のものにもしろ、何のすこしもこはい事は！

無いと決心すれば氣も引き立つ。あゝいゝ事を聞いた——危なく死ぬところを危難を知らせてくれた思は有る葵とやら。しかし又その命を救つてやっただけを償ひとしろ。今優長に人だすけの場合ひで無い。誰もかれも運さへよければ助かる事。

肚の中でこの言ひ譯を言つて、突然に駈け出してわが家へと急ぎました。呼吸も急ぐ。氣も、氣も揉める。うまく行けばいゝが——あゝ弓矢八幡、擁護や々！

第二十七

抜き足でうして宙を飛ばせるといふ六づかしい歩きかた、一心これば齒の根さへ動らかせもせぬにくたひれて、うして腰のつかひさへ痛むばかり、またしく聞

にわが家に立ち歸りました。
 歸りは歸りましたが、氣味わるくもなりました。もはや相手は忍んで来て居るか知らん。と思へば氣で氣が咎められてわが家ながらわが家が恐ろしいやう、氣味わるいやう、身がまへやら何やらで些し躊躇して居ました。
 が、家が大概とさされてある處を見れば多分は大丈夫。こゝためらつて居る内に便宜を失つてはつまらぬ事。
 さすがに年來手痕をかき溜めた甲斐に事に臨んでの斷定はすばやく付きました。裏口から這入りかけました。が、戸は明きませんでした。不思議、しまりをして出たつもりでは無かつたが。
 しかし出た時の事を、思ひ出せば、随分夢中で居た事、あるひは取りしまりよく鎖しをさしかためて出た事かも知れません。更に見回せば一方の戸がすこし明いて居る様子、そこから出たのかも知れません。
 うなづいて戸に手をかけてやをら中へ入りました。入つただけでした。あゝ神ならぬ身の人間、中には待ち設けて居たものがありました。主水が入

第廿八

る、入るや否や、一刀きらりッ！ 同時主水の首と胴とは離れくになりしました。
 毒婦と充分に成り果て、今はいちごも世の中に恐ろしい物を持たなくなつて、例の男の妻とまた爲りました。男ははした武士、誰とかがものゝ手につく樺有源太遠經といふ者で、人品といひ、腕前といひ、天晴れ一手の頭人だけの價値は有りました。が、玉に瑕、人を人くさく思はぬ處からつひそれで憎まれてのみ居ました。その氣象がいちごの氣に入りました。浮氣といへば云ふものゝ、是は浮氣よりはすこし信が固くありました。
 既に主水を打ち果たしては誰はかかる事も無く源太とささけ回つて居ましたがつねく胸に絶えず氣になるのは窟子の事でした。
 今は何も窟子をしたふといふ譯でも無く、むしろ憎む方でした、けふたく思ふ方でした。嵯峨野のかた主水と共に逃げて来たのかた絶えず苦勞になつたのは窟子がわが身の義賊をねらふ事を密告するかも知れぬといふ事、うれでひそかに時々主水にもそれとなく迫つて、どうぞ窟子を無い物にしてくれろとかき口

説いた事も有りましたが、兎角主水は應せず、其内に主水を殺すやうにもなりま
した。

爲つて後日を経て思ひ入れ入る程氣にかゝりました。うれとなく言ひこしら
へてどうか角か終に源太を説き付け、又も主水に行つた手段の二の舞ひをしやう
ど、あゝ毒も用ゐる馴れ、ば何とも思はず、決心しました。

夜にまぎれて源太は雌雞につかはれる雄雞、美人の眷愛は命をさへげて買ふも
のど一も二も無く承知して立ち出たのはかれこれ三月のはじめ、消え切らぬ菜の
花のかをりが夜の間も床しく袖にとまる頃でした。

地理を充分にいちごから聞き定めて嵯峨野に至りました。夕ぐれに兎角行き着
いてそれが庵室かどまづあちこちを見回して居る内に見あつたのは一かまへの
白屋、ちらりと其障子の間から見わたしたのはいちごが言つたとほりの顔立ちの男、や
つし形をして居ました。

すはやと胸もとどろく、相手は直に障子の影に身を潜めてしまつた處で思へば
如何にも世を忍ぶものとは推されました。

「もの申。大膽にも白屋を叩きました。」

「たれどの！」可愛らしい聲を先きに立て、あらはれたのは、こいつ僧家に不相
應の年若の女性郎ながらも田舎酒の人を酔はせるだけは有りました

「窟子どののは？」

「窟子？……化轉した體で内を見かへつて、」

「窟子どのとやらんかりやらぬ。」

「かりやらぬ。」嘘と考へ付きました。「まことに？」吃と思ひ付きました。「窟
子どのの嵯峨野の云々いふところにお出でやるごなん、東山どの、仰せ承つて
それがしが参つたのでおぢやる。包みかくすは御身のためでおぢやるまい。」

娘は顔色かへました。見て取る源太、すはと推察固め、

「いかに、是は樺利の源太遠經てお者でたぢやる。」

「娘はいくたひも後をふりむいて内の指揮を一々待つやう、――」

「かりやらぬと申すに。」

「申すに？ 無禮を言ふ奴かな。目をいからせました。」殿の御鏡をそじく必か？

まこと然ならばさだかに答へい。思はくも有る。目星を付けたからには踏ん込ん
でも？」

はや怯えて娘はかくれる、もう是までと門のとさしに源太はやく手を掛ける、
その途端、待ち望んだれ手、窟子と見とめた男が顔をあらはしました。

「御待ちやれ、許しも無くて人の關……」

「殿の仰せでまゐつたのぢや。さ、御身窟子とので……なせ御逢ひやらぬ。」

「いかさまろれがしは窟子でおぢやる。」

「さてころ？ 先き程から聲かるゝまで問答しつるになせ御鏡をないがしろにな
された？」

落ち付いたもの、相手はひくともせず、

「それがしを何と思しめす？」

「事あたらしい、道心でれりやらう。」

「道心と知ろし召しつるか？ 知ろしめしてなせ御鏡を御傳へやる？ 世を捨て
た身と御知りやらぬか？」

言葉するどく言ひ放たれてすこしたぢろぎました。

「さりとて仰せならば詮おぢやるまい。」

「仰せなりとも聞く耳は持ちませぬ。浮き世を捨てたすね者に物のたまふべき殿
ども覺えませぬ。」

あらたまつて微笑をふくみ、――

「御教書御持ちやツたか？」

正に持つて居ぬと推して言つたこの言葉、が、案外千萬

「御教書持たで武士が何過言申さう。御教書だに持なば對面したまうか？」すこ
し火の手がついて。

「對面しましやう、御教書だに……」

はや源太は門の中に立ち入りました。さすがの窟子も氣を呑まれてたゆたか、
その間源太は近づくと、縁ばなにかゝるといふ一瞬間、其間まことに髪をも容
れぬといふところ、飛びかゝりました。早窟子へ！ もう晃く短刀！
あはや、残念、終に不意でした。一太刀窟子は脇腹に！ からく身を退いただ

け深くも入りませんでした。が、思はず一聲うなりました！
 はや組み打ち。「なッ…何うなされて、このッ…」しかし刺客は無言で一閃。
 刀を持った鐵こぶし、岩もくだける握りつめられた、それ、それ、うれをもぎ
 取れ、もぎ取られまい、さア腹。組んだまゝ、椽から轉け落ちました。
 椽近くにあつた切り石に下になつた源太は腦をくたかれました。すこしばウツ
 となる、手は弛む、直に刀はもぎ取られて…
 おのれと怨みをつんざく刃、窟子はのしか、ッて源太の腦先きを柄も通れと突
 きました。ひイツと一聲、ふり切れるばかりに手足をもがく源太、あぐる、もか
 く、踏んづおせ！
 情人は終に仕留められました、元の情人に。

第廿九

あたるが残らず八卦ならば人に苦勞は微塵もなく、堯舜周孔を無二の恩人と尙ん
 で其思日にはそんな潔齋でもして差しつかへは無いの、思ひ料る事が思ふま
 りにならぬ世の習ひ、さても人間は是だけのもの、わるさすい不精が手をはぶき

勞を減らし、一のかはりに十を行はうとの虫のいゝ心即ち慈から何處でか天機の
 芽でも見たやうに工夫し、困苦して、既に樂を蓬萊に求めていゝ迷惑な、使ひを
 偶然島ながしにして仕舞つたり、便の中に黄金を探つて終にたゞその探る。ばか
 りの試験に溺れて仕舞つたりする不幸(？)思ひわびる時には痴情も湧く、今のい
 ちでも世間の慾ばりと同じ心に、科こそ違へ、なりました。

もう棒有源太は歸つて來さうな物を待てどくらせと音づれも無い、風にあざひ
 かれ、野犬にだまされて來るやうにもなれば殆ど矢も楯もなくなつて待とほしく
 て堪らず、が、別段の思案も無い事。思ひやれば家を立ち出た時の様子も物思ひ
 を争ひたためまた育てるため胸に浮かぶ、目にも残る黒皮おとしの凍とした鎖打扱。
 鎖 刀 小手 下 下がさね。下重ね着る時には眞裸に爲つて眠れながら
 いちごに着せて貰つて居た、その時の肌の色のうるはしかつたのは今の記憶に
 も留つて横壁の張りこみが只今の面影を見せて居ました。鎖を既に着了つては壁
 花をふつて身を潔め、やがて首をあげて來うすどにッこり、笑つた、その影も最
 う無くなりしました。

したがって出る考へは或は仕損じたかの苦勞でした。仕損じたか知らん、如何に何とて相手も相手あるひは源太が血氣にはやり過ぎて復り討ちにでも爲りは爲ぬか、爲つたかも知れぬとも思はれました。無つたらば無つてくれなければ一杯が胸に充ちて居る下へ無理に割り込む者へ——さあどうしたらいいものか。いちごからの回諜と窟子が源太を悟つた事ならばいよくいちごの隠謀露顯が早くなる次第、胸ぐるしい至りでした。

兎角源太が或は殺されたらばとは考へても幸の心から其殺されたのは重なる愁の種でも有りませんでした。主な種は自分にかゝはる事、即ち隠謀露顯、それが氣づかほしいのみでした。

よし殺されたら殺されたで仕方が無い。なま若くて小奇麗なだけに肌さほりも悪くないものゝ、さていくら惜んでも事が既に去れば詮ない事。外に男を見付ければ猶世界にいくらも有る事、それは決して深く殘りをしるも無い。か、たと我に及びかねぬ災、それだけが氣にさはる。

あゝ利己、利己！ 夫や情人を愛するといふのもみんな利己の影法師、自愛が

有ればこそ他愛も有る。我身あつての男子。

山は曉の雨に身をきよめて快く朝日に映る、その映るさまを凡俗の人間に見せやうとて映るものか、たゞ山は映るだけを山自身の得意とするだけの事。

釋迦が世俗の惡業に溺れるのを憐んで身を捨て、それを救はうとしたといふのも何の僧家の辯護の外では無い。釋迦はなる程世俗を憐んだ、か、それが思ではない、釋迦は人を憐む心を多く持つて居て憐んで人を説得すれば其處に愉快を覺えて、ますます其氣になつた譯、すでに身の愉快を得る、さ、これが利己で無くて何？ わが思ふ處が叶ふのは叶はぬのより心よく、人間だれもそれを望む、即ちはちわれを愛する譯で、それを愚物は尙んで置く位な世のなか、釋迦も身には及ばず、さりとして殘響をすゝる非人もいやしむに及ばず、自愛の念は只平等に行きわたつて居る事を思へば宇宙は無造作に出來て居るものとも知れる。勞を示して快を買ふ、その勞の度が多ければ愚物は其快を問はずにその勞を尙める仕儀、看破れば世に成効した英雄も豪傑も何のわれと同等な話し。

と思へば何も苦勞は無い、世はますますこねて丸めて自由になるやうにも思は

れました。思へば男子は勇壯、婦人は優美、いちご自分は優美で、婦人だけの處は正に有る、之に男子の勇壯が加はつたなら天晴完全の人間となる譯、どうや左様なりたい。

外を柔にして内を剛にするよりは外に剛柔兼ね備へて又内にも剛柔をそるへたくなりました。これで以て世界を見れば、あゝ小、小、男子など何でも無い！淫と笑ふなら笑へ、狂と言ふなら言へ、その能だけに従ふのが不道理か？ 何の人間の仕業に自然の實が有らう、自由に暮らすが一生涯、牽束を受ける罪はつくらぬ。

極端の論を行はうと志した果ては終に野武士などのあふれものを集めました。一夜ばかりの殆んど一夜づま、野武士の中の一癖有るものをば悉く情夫にして、そして情夫相互にうの情實を知り合つて居て些しも怪しみませんでした。今日は甲と共に柳の堤に手をたづさへ、昨日は乙と一途に紅葉の谷に逍遙する、その事とも互に思ひねたむ景色も現しませんでした、正に遊女と同様で。けれど其不道理を陸から微な聲ながら叱る良心も有りませんでした。が、辯護もまた

付きました。むかし小式部内侍とやら宮中でさる公家の兄弟を情人に持つたどやら云ふ事、聞き馴れば後世だれでも笑ひもせぬ、今この冠と履どが處をかへた世の中ですこしぐらいの不徳が有つたどて誰が目ざして怪しまうか。是がいちこの猛惡な辯護でした、

激變の時代にあらはれた人に見識の固いものは少いこと、穢れた物を運ぶ百姓は麝香を却つて嘲りました。あゝいちごも元は良家の娘、なまじひの卓犖が禍を爲して人間の中の極めて汚ぐるしい者となり果て、さてそれを悟りが付かなくなりしました。

野武士をかたるふ其目的は外でも無く義政を歪ふといふ事に有つたのです。すべて妄念は雪に凝る雲と同じもの、はじめは雨と降るくらゐな處が望みで後には寒冷の添へ物を得て雪とまでに凝りかたまります。いちごの血氣の動王心の奴隷となつたのもまづ此類ですすなはち最初の養育と境遇どが盲の妄想を一種の信に象つた元でした。

人間に與へられた命といふもの、それを捨てるのは何とも思はれませんでした、

想像がわるく強く働いたけに。義政に一太刀怨んだなら殺されてもいと、と思ひを固め付けけるのも實は身で身の薄命を賺すやうなもの、六づかしい境遇に立ち至ッては苦肉の計から生ずる満足に満足しやうと思ふのが人情の普通です。

で、窟子の事も源太の事も氣には掛かつて其實ほとんど制し切れず、たゞ其あきらめ方や何かについては既に心も定まつて居ましたか、眞を叩けば妙な一念、つれなくされただけに猶いくらの残りをしてい處も窟子にあるやうで、その癖心の表面では其未練をわれから作つてわれから毀しても居ました。言はゞ前後に思ひ迷ふといふ事、まづ坪も無く空中の樓臺にあやなされて居ました。

第三十

叡山の鐘の音だけはさすがに定まり固く今日も入相を告げて茂材にかへる題の泣き聲もおのづから騒がしい中に淋しさを含む今日春の暮れ、薄花田の夕霞は金隈の夕紅と出會ツて床しくも野末を艶消しにした風情如何にも奇麗でした。いづれの陣からの脱け馬か、野の果てにそろく歩いて居る駒の影も薄黒くなり行いてはや一つ星がきら／＼現れました。焼け残ったか、伐られそこなったか、處々に



立つ櫻、夕日に蔭色を一刷子掛けて幹を半分てりつかせてほろほろと些しづゝ落花して居る其下には瓦の間から咲く葎が褪せぬ紫をかざして居ました。天うつり地かはって、ろれでも自然の春は平等、「いりあひの鐘に何とやら」の古歌そのまゝの景色でした。

前よりは見上げた打掛、櫻色の衣に布垂れの笠をつけて伴を二人ばかりつれていちでは散歩して居ました。其道すがら何物か、いづれの陣にかよふ小法師か右の草叢の横に方ッて吹き鳴らす笛の音が哀れに聞えました。

過ぎた雨の痕がまだ乾きはてぬ道の土、ぬらつく足元に入れる力もほどく冷れるばかり聞き惚れる笛の音でした。

「あれは如何？」非常に感じた体、いちでは斯う言つたまま、顔を紅らめました。

聞けば、さても意味ありげな音色、はて練りかへして又吹くか、其しらべ、

「花よ 花、花、君 手折らまし、さくらがりには いでしかを」

それにしても心にくい奴、生めいた其一曲、誰に思ひを運ぶのか。笛の音をたよりに探ッて行けば道端の石に腰を掛けて居たのは年二十二三、肌目細な顔立ち

の若武士、いちごはぎよツと胸に來ました。
末野は紅く、遠山は紫、みがき上げた天地にみがき上げたやうな人、あゝ一帽の活きた繪巻物。

たちまちにあらはれた人の體、若武士は笛を取り直して屹と此方を見て意外と思ふ風情、さすがに照るばかりの美人を見ては手持ち無沙汰にもなつたか拍子に一寸笛の穴なぞ見る真似をして居ました。

「卒爾ながら、いちごの地、今の笛は和君の……」

男は無言でうなづきました。

「ゆかしき音色かな。仇々しき調べでありやる」
はや押れた言葉。

「これはいかに」。わづかに口を開いて、ろして笑聲、「古曲でありやるを」。

「古曲とていみじうありやる。聞く身がほどく心うばはれました。卒爾ながらいづれにおじやる」。

まづ所と場合ひとと違へ、窟子にはじめ氣地で逢つた時の應答と同じやうで

した。其間眞底男をよく見れば見る程惚々する風體、また之に心が動きました。どうにか角にか説き勸めてそれから之をともなふ事となりました。

道々の物がたりから不圖耳に入つたのは意外の言葉、すなはちこの男がもと窟子を知つて居たとの事でした。

すなはち此男は夢王と言つてはじめ矢張り窟子と同じ寺の行童であつたとの事で、其時から窟子とは中わるくも無く交際して居たとの事、窟子の素生のあらまじはいちごも前に主水助から聞いて既に窟子をわが兄弟かと思つた、その兄弟であるなしはまだ判然しませんでした、既にこの夢王が其寺に居たとも言からには紛ひもなく窟子を知つて居た譯と信じました。

さすがに今打ち明けて自分が曾て窟子を戀ひしたつたとも言へず、たゞそれとなく遠まはしに尋ねると夢王はわづかに斯うこたへました、

「鱈丸は死んだとやら人が言ひました」。

たゞなら強く胸にも來ぬ事、しかし今の場合ひのいちごはぎよツとしました。「死にまひた？」

「殺されたとやら」。

「誰に？」

「誰か知らねと武士との事でおぢやる。されどこれはうれがしも聞いた事、くはしうは知ませぬ」。

思ひあたる事のみでした。そして武士はどう爲ったかと言へばそれまでは知らぬとの事、やゝ隔靴の心持ちもしました。はたしてたしかに仕留めたものなら、稍末練も有るが猶心もいくらか弛んだやうでした。誰から聞いたかと問ひ正すと、嗟峨から来る田舎人からとの事、その田舎人には猶逢ふたよりも有るとの趣きゆゑ、やがて猶深く探つてくれると頼みました。

頼んだものゝいまだいぢではわが名も素性も明かさず、窃に男の氣を引いて或は勤王の心でも有るかを探りました。が、雲か霞かすこしも分からず、分からぬまゝいよく心を籠めて探りながら兎角其人品や舉動を見れば例のくせ、あはれ又之としたりもしたくなりしました。

男はわづかに其名と其手とを明かしました。手は伊賀の島合の勢で誰を味方に

する事も無いとの趣き、その名は舊の名を其儘にして夢王二郎と言ふとの事でした。

一度くづれては終にかうなるもの、また此夜はこの男を泊めました。泊めるとの命にしたがつて周旋をするのは他の手下ども、更に嫉妬の餘もありませんでした。

すでに夜は更けて春ながら闇にもれる風がさすがに身にどほりました。あゝら寒、寒いといふのは附け句、肌布子であたゝめる程でも無いものを、何かそはくするいちごの體、夢王の魂はほどく身に添はず、聲ひくゝして徐く何かさゝやきました。床の上に起き上がって顔見合はせてにっこり、肌あらはな男に小夜着させかけて下からいちごは其顔を見上げて居ました。「何みそなはず、はづかしやな」。益も無く互にたはむれてそして男が、

「是からは手をはなれてそれがしも御身の許にまゐらうぞ。いかにや、御心御進みやらぬか？」

「和君よそ御心御すゝみやるまじけれ」。兩手の掌でいちごは男の片手を平たく押

しつめて、「嗚、秋風もやがて立つべき。」

「秋風！ 御身の方より。」

平手でした、かに男をうつ美人の手、うたれて怒りもせぬとはさて戀ひも曲物さゝめきの末、あら！ そもく眞偽は？ いちごが掛けた色々の謎、やうやくに解いて打ち明けた夢王の言葉を聞けば是天晴れな公家方、さすがに嘘とも思はれぬ體。

いよく慕はしい心地もしました、兎角世の中の男は白無垢でツカ、秀句で女をだますもの、この夢王も何を言ふか分からぬもの、今聞いただけを眞とすれば兎に角にくも有りせんでました。

第三十一

その次ぎの日から夢王はいちごの許に居て手下どもにも一々對面して挨拶しました。いちごとして藉よりは蒸を好む人間、髯黒の野武士どもよりは夢王の方が氣に入りました。

こゝに至つていちごが手許に引きつけて居る情夫を數へれば夢王をも入れて總

計四人、ろの一人は近江藤太と言つて年四十前後の力たくましいもの、その一人は油小路多門とて年は卅二三辯に長けた者、その一人は庵小太夫とて年は卅五六是も力たくましいものでした、之に附け加へたのは夢王、力量の度は何うか分かりませんが、辯と人品に於ては天晴れ三人の外に超れて居ました。すべて互に一ツの目的をあらそふ場合ひに於ては其間相軋るのが常、どうして今までにいちごは其軋轢を起さなかつたかと言ふにすべて各に對する情がいつれにも優り劣りなくあつたからです。過ちが有れば直に譴責し、手柄が有れば忽ち褒めるその恩と威とは常にあやまたずに行はれました、無論業が無くて生計を立てる事と

の手下どもが綠林の露に命根をつなぐの言ふまでも無い事でした。今度新參の夢王が来て俄に事々しくもてなせば衆人の怨みは直に集まる譯、蔭からいちごは好いやうに夢王をすかしこしらへて表面は之を並に只とり扱ひました。で、流石に目立つところ多く有りませんでした。が、兎に角やさ男つひ洩らす濃な睦言も有る、ろの都度餘の三人はひそく話しを爲る事も亦折りくは有りませんでした。

この勢で長く續けばそれこそ世はくるしくも無い事です。が、ことに其實夢王にあつたいちでの愛情、それをいくらか嵐に着る氣に、爲る氣ではなくて猶、爲つて時には夢王も慣れてくれればわが思ふまくを行はうとする、それらこれらは終に餘の三人に充分の怨みを買ひました。

いちでが夢王を愛した其重なる處は只夢王の容姿にあつたのです。夢王とて可なり奸智にも長けて居た人間、それこれもいちでの心を見抜いて兎角その心をひかへました、賢しくて牛賣りそこなふといふ昔の言葉をこゝに引くにも及ばず、天晴れいちでは世の中の男を手の内丸めるつもりでした、が、其つもの下から相手はまたいちでを丸めるつもりでした。

兎角婦人の特性としてことに褒められて喜び、また刺られて怒りやすくなるもの、うはべはいちでも磊落を粧ひに粧つて喜怒哀の制裁を容易に受けぬ体にして居るもの、猶他人の口は常に沖々の苦勞を大小つねにつくる源でした、手下にして居る情夫どもは何れもいちでを表向はたつとむ、それでいちでも嬉しがる、嬉しがる体を顔にもあらはす、見て取つて相手はろの方へのみ立ちまはる、自然男

をつかふ中から男につかはれて居ました、男をはかる下から男に料られて居ました。

かつていちでは昔ばなしを聞いてさすがにつくづく感した事も有りました。しかしから泉式部といひ、赤染といひ、紫式部といひ、いづれも女として無上な榮譽の名を残しました、よし其榮譽は女の一分を盡くしたといふ榮譽で無いにしろ兎に角他人が望んで中々いたれぬ名をば受けました、其榮譽は受けた、いくらか當世と後世と尊崇の度はちがふにしろ、猶これら女性が其時代に於て世の人から尊敬をば其長處に得た事、それでそんな生活をしたかと言ふにつまらぬ官人と縁を結んで青侍の一人か二人かつかふが關の山々らの身分に爲つて世をおくり果てた始末、さればとて高貴顯門に妃とでも爲るものが必しも美人哲女でも無いところを思へば實にこの世の中はいはゆる運といふものに縛られて居て運をはなれて外に何う爲やうも無い事かど座ろに嗟嘆されました。是を嗟嘆すると同時に道長の驕奢、清盛の我儘、いづれも聞き覺わが胸に事實と爲つて生まれて、兎角男ばかりがますます尊くなる心持ちもして、つひ又自分を男に象つて男をはかる氣

に爲り、それで又其下から男にはかられましたが、はかられたからと言つて決して男が女にまさつた物でも無く、もし料つたからとて女が男より上々の物でも無い事、料り、料られるは一陽一陰の即ち影と日向だけ、雄波が過ぎて雄波が代る、その循環の道をたゞ偏頗に観たばかりで、虚心になつて之を見ればたゞ兩方に正負が往來するばかりです、或は自分も男にはかられたかといちごも思ひました。どちらにも口實は付く、つひわが先入の考へがそれを辯護する、既に見れば世に男のため身を失ふ女もある、また女のため身をうしのお男もある、たゞ何が無し、双方同じ譯と辯じました。

たゞ、姫の陰にのみ居た女郎花がにはかに廣野にうつされて淘汰に遇ひ、大人びた考へも彼是いろいろには出ました、全く曉り得なかつたのは舊の手下の情夫ども三人が夢王をにくんで居る事でした。これらの中にどんな謀計が熟して居るかは知らず、今のところほどく宿癖の動王の心を押しつけるまでに物の哀れの花鳥の思ひが極めて切で、夢王の色香にまよふがいちごの主の所存、思ひつかぬときは思ひつかぬ者、怖ろしくも夢王の寐首をねらふ謀が熟したとは更々心づ

きせんでした。

謀は明夜を限り情夫どもが打ち揃つて酒宴をし、事に紛らせて殺さうとの事でした。神ならね身のいちごを始め、夢王さへも更に知らぬ體、その前夜は夢王がいちごの側に居て語り明かしてうかく明くれば今夜といふ其日にもなりました、朝起きて眠さうな目をしてしづかに獨り椽端にすわつて外をなかめて居る夢王の後から聲をかけたのは小太夫でした。

「夢王」

「小太夫か？」かへりみて不審顔、「昨夜は和主が出る定まりなるに、もう歸つたか？」

「あいや、財はこの頃多く取りあつめて今五日六日手を動かさず暮らせるや。」

「さりとて誰か？」

「昨日の夜の事、この小太夫が手柄にて。」前後を見まはして、「こよひその祝きに酒あるまはうぞ。和主も家に居て飲みやれな。」

「何よりな。受けうぞ。」

五六日前までは言葉に針を包んで居た小太夫が昨日今日からは此機嫌がほ、それ之餘のものも亦同じやうなのは餘程うれしい事が有る事も見える。やがて夕暮れともなりました。あゝ今夜を限りと狂はれた夢王の命、知らぬ身の淺ましさを、同じく夕ぐれを待ちに待つて、すなはち死ぬのを待ちに待ちわびて、

「もう日は暮れた。このほぎは？」

いくたびもした催促、やうやくに夜の亥ちかくから祝宴もはじまりかけました。厨では小童が酒の用意に急がしいところ、さも見難ねた體、しかも早く急ぐ體で酒を盛る世話など夢王も立ちまじってしました。目引き、袖引き、夢王の不念を互にあざけり合ふ三人、いよくすこし夜も更けたらばと手々すね引いて待ちかけました。夢王はまだ坐に出て來ぬ、それをしきりに呼び立てました。

第三十二

いくたびも呼ばれた上やうやく夢王は厨から出て來て座につらなりました。「夢王」小太夫が、「和主いたく待ちわびつらう。宵の間にかさどがましよう酒を急がせたに、さりとては情であつた、厨にてまめくしく。いざ、聞こしめせ。」

手をあげて呼んで酒盞をさしつけました。が、直には受け取らず、

「かたじけない。なれど、夢王は今持つて來た銚子をゆびさし、「東山へまゐる御酒を今取つて來たぞや。聞こしめせ、一つぎ。」

「東山？」

「まゐる樽酒ろれがしがかねて盗み置いたのぢや、氣うといままでの味ぢや。きてしめせ、方々、それがしは其後にて。」

勧められていづれも喜び立ちました。三人が三人たがひに杯を取り上げて、

「わらべ、給仕ッ。」

給仕に注げと言ひつける、その途端すつと出て來たのはいちごでした。さすがに頭、見ていづれもすこし座を改めました、まだ注がぬまゝにして、

「夢王どの、いちごが微笑を夢王に向けました「めづらしい御酒のことに羨も飲みたうなつて、いかに一つぎ羨も、喃。」

「御身が？」と夢王は言つただけ。

「御身がとは？ 何いふかしくて？」

「いふかしくはおちやらぬが……」なせか返答にまごつきました。まごついた筈その酒は毒酒であつたからです。實は朋輩三人が夢王を殺さうとして居る密計をさくも夢王が察して仕舞つたのです。はじめは途胸を突きました。三十六計にぐるに如かず、逃亡しやうとは思ひました。が、其足を引きどめるものがありました。寶の山に分け入つて既に玉を抱いた末、よし罪を負ふ小人の身にもしろ、うの玉を捨て、逃げるには忍びず、願ふところは玉を永久の肌守りともしたくなりしました。何心なく來てものがたりいちごを見れば、あゝ今更ならぬ事ながら美しい。これを捨て、逃げられやうか。と言つてうかくとして留まるのはやみく／＼相手の謀を成就させる譯、こゝに至つて苦肉の計を案じ出したのです。

酒もりに托して殺さうといふ先方の謀。その裏をかくのは此方から毒を盛るに越した事は無い。やがて毒をも用意してさてまめく／＼く厨に入つて立ちはたいたのも何處ぞの張り合ひ、うまく酒に投げ入れやうとの野心、が、目角がしげくてつやく志を遂げられず、其内に小太夫たちは早呼び立てる、今さら仕方も

無く、叱るやうにして持ち運びの小童から銚子をもぎ取つて、きはよい處で一つかみ、投げ入れられた時にはさすがに胸もおどりました。

で、充分うまい早速の出まかせ、ふりかゝる思ひさしを切り脱けて返杯していまや飲ませやう、いまや血を吐せやうといふところで、さてもく、あゝ運のわるい、いちごが意外にも出て來て、そしてうの酒を懇望するとは？

どうしたらいいか、殆んど泣きたくなりました。あゝ悟ればいゝに。何が凡夫にさぞれやう。あゝく／＼これを知つたならあらかじめ打ちあはせして置いたことなら宜かつたに——うれにしる打ち合はせすればいちごも死ぬ、死ぬいちごか、玉が無くだまって命令のとほりにすればいちごも死ぬ、死ぬいちごか、玉が。玉が無くなつて何が目的？

さてもく／＼嗚呼身が煮られる、

「夢王どの、さかづき」。いちごが手ツツ手をもう出した！

成るならこの一杯だけ毒が消える。消えたかはりに跡濃くなれ。畜生、小わッば、給仕の生意氣づら？手を出しくさつて銚子を取らうとする。

「待…待て？」こらへ切れずに給仕を叱りとばしました。

これはと不審、不審にかはるいちでの面色、あゝ夢王の背中には打水。

「いちで御、御身、御身、御酒は…」目をしばたいてそれと知らせやうとしました。

「御酒は何？　ことをかしい、何御言ひやるか知れもせぬ。何事の怪異がありやる。」

どうしても通じのわるい、すこしはこの胸の苦勞も知りさうなものを。切迫つまった此場の仕儀、もう目的は大抵はづれた。うれにしる毒酒の仕末うれが付けやうも無い。

突然聞える外の方の「さわがしい物音、何事と一同氣を其方へ取られて目を見合はせて居るところへあはたらしい注進、

「武士が。」

「武士が？　捕りに？」

「なか／＼大勢。」

言ふ間も無く早くこみ入る武士、もろ聲に「ぬすびと共？」

すは召し捕られるのか。急にさわぎ立ちましたもう酒どころか。

近江藤太と庵小太夫とはさすがに力量に於てはかね／＼自慢のもの共、押つ取り刀で敵にわたり合ひました。

「いちで御あふなし、とく／＼御のがれ…」

さすがに抜け目の無い夢王、味方三人に聞えぬやう小聲で言つていちこの手を取るや否や燈火を消して裏手へまはりました。

が、早武士は五六人裏手にもまはつて居る體、當惑しました。しかし思へばよく／＼の鋭い男、暗さにまぎれて斯う言ひました、

「面々いちでをばもう捕りまいた。表口の手には捕りまいたが、かしてに敵が必死とかいって…疾く早く御救ひ…裏はもう大事ありやらぬ。」

同時、天運、表口での非常な物音、裏口の武士はうまく欺かれました。直に引きかへず、この圖と夢王はいちでを助けて難なく落ちて仕舞ました。

それからは直ばしり、百姓家から馬を盗み出し、二人纏づらを捕へて兎角乗り

ころすまでに駈けさせて愛宕の裾まで行き着きました。はや充分に虎口をば免かれました。

今までに見たことも無い夢王の早速の頓智、いちごは眞底舌を捲きました。はや息を入れさせて馬を緩く歩かせながら今夜敵をあざむいた機轉をばほとく涙をこぼさぬばかりしんみりとして禮を言ひました。つねは口達者な女、心が充分うたれたこととしてしほらしく首だれるほどの體でした。

こゝに至つておもへば夢王も中々のもの、ふざけ合ふ中とも見えぬほど眞面目になつて謙遜して、ろして眞實を面にあらはす、いよくいちごも感心する、こゝばかり不徳不倫の今までの間に珍らしいほどの清浄な。愛情が、あらはれました。清浄な、愛情。世は不思議なものこゝに始めていちごは眞の男女の關係の味を知りました。

やうやくの事て白屋を見付け、一夜の宿を頼んで泊りました。妙なもので、何か氣でも改まつたやう、今さら二人夫婦めかして一ツ夜具を被ふのも極りのわるい心もち、考へて見れば何もさうまで思ふほどの理は無いところ、しかし「あゝ

深切な男」と絶えず思ひ出す、その度ごとに男が可愛くて可愛くてほとんど下へも置かれぬくらゐ、つひ何とも角とも一種口に言ひつくし得ぬ感情が身をふるはせるばかりに湧き立つて自然つくりかさらぬ嬌羞をさへ漏らししました。

枕についてつらく思へば種々な考へが泉のやうに湧きました。今までに自分が經て来た運命がこの一段落に逢つて蘇るやうに胸に浮かみました。

實のところ主水助と夫婦になつてからこのかた二三人の男を情夫にしていちごも情慾にふけつたもの、更に其間に一片も眞の愛情といふものは無くてあつたのです。もとく主水助をばみづから進んで望んだものでも無い、たゞ境遇に壓制されて仕方なく夫婦のやうに爲つた、それだけで、馴染むにしたがひ多少愛情もこくなりましたが、又甚しくも無かつたのです。姪婦の普通としてこゝに突然愛情を深く寄せるかと思へば忽ち冷めて他に移つて、しかも何の相手にも一度は中々の熱心を示すもの、たゞいちごは所謂姪婦の中でもすこし人形食ひの方、比較を土臺にして撰めば玉味贈より櫻味贈を好む賢てした。やがて樺有源太と野合して一時は源太の好意——わがために窟子をさへ殺さうといふ情——に感じもし

た、それも永久の場合ひで無くて、やがて其後の源太がいちごに拂つた厚意の報酬を受け取るべき時は無く、行き方も分からなくなつたのがふたゝひいちごをして眞正の情愛を経験させる折りを失はせました。終に第三番目がすなはちこの夢王二郎、眠り薬で蕩かされるやう、目もくらむ機轉、それで人間最大の目的、自身、むしろ自身の命といふ貴いものまで救はれたと思へばしばゝ心にも感じ入つて、しかも手に手を取つて逃げたのが猶感謝の情を深くする種、すなはち此處にはじめて男女の間の眞の愛といふものを知りました。

月は無いもの、閨の戸の透間からも見える空、それも我身に似た境遇、わづかに闇を穿つ月影がかすかながら凜然として、名づければ眞如の光りを輝かして居ました。風そよ／＼、浮雲がしづかに追ひ除けられました。

思へば眞節は愛の花、愛の根ざしが固くなつて始めて眞節の花も咲くもの、言はゞ女子に眞節を守れと説き明かすのは愚、むしろ夫婦の間に眞の愛が出来ると務めるのが智で、愛をはなれて眞節の無いところが分かれば自然人間の眞節は男女双方の平生にある事です、すでに一片この高尚な志が心に根をさしたからに

は仇めいた他の念、劣情、不徳、不倫の悪魔は招かうとて来るもので無い、この境界に意外な事からいちごも入りました。

白屋はたゞ一間、ろの家のももの側に臥すこと、いちごは夢王としみ／＼物たりも出来ぬ、たゞ無言で目をねおればいよく萬感が其目を訴えさせて改まつていまゝでの経歴を幻繪にしてもあらはす、見聞きした人、つきあつた相手、わが臨んだ境界や運命、それらがいづれも暗くなつたり明るくなつたり濃く見えたり、薄くあらはれたり、われを責めて高足でひよい／＼歩く人の姿も見えれば、われを嘲つて鼻をつゝく人の影も見えました。

第三十三

枕に就けば百事しづか、身體の苦痛もやゝ遠ざかれば相手になるのは様々の妄想ばかり、今までの自身の経歴はほと／＼夢のやうに爲つてゐる何故と言ふ事も分からぬ程でした。

こゝに生れ落ちてから殆ど二十年、肉身以外に眞底の愛情をばまだ一度も見なかつた、その矢先宵の夢王の深切、さすがは男と感ずる下、直に萌すのは世界に唯

一人の人の評、境遇が不手際に行かず、またいちご自分も男の純粹の愛情を招くやうにもせず、そのために終つ眞の愛といふものを覺えなかつた身が生かへるやうに今は爲りました。

思ひ出せば身の毛もよだつ、れめいて敵が斫り込んだ時庵や近江が大刀を抜きつれてはたりくと一人二人斫り捨てたのは確かに見た、それも今の今まで目に残るほどの凄まじさ、うの生死二つの凄まじい處を難なく助けてくれたとは！

あゝ命の親、その命の親は、見れば命の子と枕をならべて早もう寝入つて居る、やすらかに、すやすやと。寝入つた、ても大膽、さてもく男といふものは大したもの、見た事實は直に寝め言葉と爲りました。今までに終つ出さなかつた女氣も催ほして肌あらはに寐た男を手さぐりで風邪引かせまいとわが上着さへ脱いで被せる始末、被せ了つてはい、世話女房に爲つたやうで氣も嬉れしく直に涙もろくなつて情の水をもまたほろり。

つかれに魅せられて男は前後正體も無く、すこし觸られても一切夢中、肌近の手の取つてその指を窃と手遊にして折つて見たり伸ばして見たり、果は堪へ



す此方から顔を近づけて其指に一接吻、とゞろく胸を憶はず寄せる微笑、はッと思つて誰か見ぬかと闇を捻れて目を開いて見る埒の無さ。

才子は自身の才を知らず、淫婦は自身の淫を知らず、たゞ才子はわが才を以て世界一般と考へ、淫婦はわが淫を以て一切普通と思ふもの、既に才又淫の見認めが自身につく以上は前に迎の中に居た人が既に外に出たものです。さすがにいちどはまた迎の外に出たものでした。

世の中の娘が男に嫁いで其男をしきりに尊崇するそれら實例を見て前からいちどは冷笑して居ました。男女の間の交際は情交によつて成り立つもので無いといちこの平生の意見でした。世は陰と陽、雌と雄、雌と雄とが天然の情慾を満足さへすれば男女の能は終るもの、男はつまり女の器械、女は男の玩弄としか考へませんでした。たゞそれだけ、自然いちどが男に對して充分の愛を拂はず、また従つて眞正の愛を買へなかつたのも無理の無いこと、それが實のところ今日はじめて變はりました。

つくくと自分と今までの不心得、即ち人生の運命をたゞ咄嗟のもの、自然の

もの考へた事の誤謬が明らかになりました。性質、氣が克つて居るだけに意地もつよく痛癖も盛に、馬が移るほを目は冴えに冴えました。疝に引き釣つて足の指は針か何かで突かれるやう、時々は何と感もわからず、びくつきました。眠られぬと思つたのも朝不圖目を覺ました處で思へばいくらかは目睡んだ事でした。つひ昨日まで京浴もよりで不潔の目を以て見た朝日、今日はや、清く拭はれた影、何となく氣も晴れやか、過去つた経歴が影に爲り、日向になり攻め寄せに寄せるもの、ろれながら引き立つ處も有りました。顔を清めて山嵐に嘘いて、谷で濡らした手巾を絞りながら様に腰を掛ける夢王の様、ても寝も見上るやうなやゝ瘋子よりいくら宜いか……

朝餉を食はずに行く手を急ぐ男の體、いづれ思はくの有る事と問ひませす男の言ふまゝ、早く白屋をば立ち出でました。立ち出で、其目に殘つたのは白屋の主の顔、妻も無く、弟かとも思はれるものとの共住ひ、鋭い目光でした。

やがて男の向ふ處は丹波路、丹波越に差しか、つて山猿のさわぐのを珍らしさうに見やりながら是彼七八里も山路を歩いては流石にいちごも女、足がよわつて

も來ました。氣が些し弛んで昨夜のつかれも亦やゝ催す、果は足首が頼つたく爲りました。

段々木ノ根岩角が敵になる、これらを避けく、路を拾ふ始末となる、やがて踏み中てれば腦まできり、終には一步を移すのもつらく爲りました。つかれたと訴へるやうにして男に言へば只微笑するのみでした。

「さう御つかれ。されどしばらく。」取り合ひもせぬ體。

「御身、こらへかねました、」負……」が言いにくいです。今さら何の處女めいた仕儀、でもさすがに熱愛はあきけ無さを隠しました。「負……」と言つただけでにっこり。

「負？ 負とは？」

「ほい、い。」

「是はいかに、更に解せぬ。何事でありやる？」

「今までに可なり思ひ切つたことをも言へた身がどうして斯う姑息に爲つたのか、定まれば早最相手は夫、何の遠慮！」

「負ふて…御くりやれ」。精一杯。

「げによ足のつかれて？ さぞくく。されどしばらく忍びやれ。やがて従者も来りするに—程もあるまじ」。

「従者？」聞きとがめました。

「然、従者が」。

「従者とは御身の？ この山路に？」

落人の身が何しに従者を持たう。まして従僕とも爲って居た夢王、何の従者を持たうか。

「御身従者がありやるか？」

不審の體、しかし夢王は思ふ坪と言ふやうな得意の顔付、道傍の木の根の苔をはらひました。

「いぶかしく思ふのは理りく、されど之にはいはれの有る事。もう大事もかりやらぬ、腰なを掛けてやすみやれ、いはれ物語らうす。」

半ば分かつて半ば分からず、同じく腰を掛けるも男はやがて改まりました。

「いま迄 まことを明かさざりければ無いぶかしう思やるべけれど、今は明けて語るべし。うれがしは今夢王と名唱る身でない、まことはこの丹波の與謝の武士與謝小二郎茂房といふものぢや」。

言葉は無くして目を睨つて此方を見るいちごを微笑の籠った尻目に掛け、

「名も傳はらぬ武士ながら今では與謝の一手の主で、頼まれれば山名にも加掛は爲る。口ひろければ物事に缺けしこと無き身の上ぢや。たゞ煩惱には勝てませず、今居る妻を餘處にしてまことは御身にあくがれて斯うまで事は果てしもの、思ひ出だせば世は奇しきかぎり、東山の様子を探らうとて身をやつしてそれがし一人が都へ出で、何氣なく草の裾の笛三昧、なまめいたる唱歌を吹きぬしが思はぬ仕合せで料らず御身に出で遇ひしが、戀はまことにそれより燃れた。よりく尋ねて御身の素生も聞き知りしが、いちごと言へば匿れぬ美人、いかでと思ひし念も晴れて昨日今日とも爲ったからには元奪取ったこれまでの妻は假室で御身は妻、去りがたき縁つながら口かまびすしき姑は一人有れを外に目ざはりても無い。與謝へは是より遠くもあらず、こゝらわたりを常にわが家のものもさ

まよふからには必らず出で遇ふことも有るべし。たゞそれ送こらへやれ。驚くか知らねども御身を妻としたきはかりに東山の事も念れて常に御身にかしついでたのぢや。」

一伍一什の物がたりは意外ながら流石に思ひ當りもしました。如何にも初から平凡のものとも見ぬなかつた夢王、この位の経歴も有るであらうとは信ぜもされました。それにしても料らぬ幸、よし小身にしろ、一手の武士の北の方と今爲らうとはさて何處に運が有るか知れぬ。

更に夢王の素生を問へば全く幼い頃は窟子と友だちであつたとの事、その生れを尋ぬれば物心も知らぬ頃に寺へやられたのみならず、様子を知る先代の師僧が何處へか逃亡して仕舞つたことゆゑ分からぬとの事、その姑といふのを聞けば今の妻の母とのこと、分かつたのは其くらゐなもので、猶其他の秘密は夢王——これに至つて名もかはつた——與謝小二郎も打ち明けませんでした。が、實を許せばいちごの山寨に討手を向けさせた、その訴人は實この與謝で、庵や近江が自分を殺さうとの共謀の裏をかく萬一の手段であつたのです。其度量、更に角殿國に

は一廉の用になる方でした。

はたして與謝が言つたどほり道で二三人の手の者に遇ひました。何か一言二言命令する與謝、直に今までのいふかかしさうな目付に引き換へて敬意を含む雑兵、いちごを交代に負ひました。

程も無くして與謝まで、男の足、走り附く、向ふに見ゆるが領をさし、めす従者の世辭、見て心も浮き立ちました。が、只一つ氣になる事が有りました。まだ見ぬだけに氣になるのが大きいやうでした。外でも無い、與謝の今までの妻、それが無かし怨むであらうといふ事、もし今いちご自分が乗り込んで正室を爲つたからには。

もしやと思つて其心配を與謝にも正して見ました。「そも妾がにはかに舊の君の上立つては姑の刀自もまた舊の君も……」と言ひかける、その下心はやはり上立つのを望む、ところで、頼もしい、與謝は微笑で指でかるくつつといちごの頬をついて、「この笑顔が有るものを……」と難なくにげて仕舞ふばかりでした。男は既に自分に首つたけ、その保護がたたく頼み、根が、しかし勝ち氣、さうなる

ものか肝を据ゑて乗り込めどは其勝ち氣が絶えず出沒して煽ぎ立てました。與謝の館に乗り込めば早くも先驅に告げられて出迎へに出た館のものと、主君に禮をした顔で直にこなたをば不審さうに見る、知らぬことゆゑ仕方も無いことながらしかし又いましくしい、「今にわが身が正室になつて見せ付けておのれ」が、身をかへりみれば旅に汚れた着物が一枚。はつと思つて見る向ふの書院口、出迎へに出る女どもの體、うの綺羅は千紫萬紅、さア大變、肩身がせまい。笑はれずめも否、かきくどきました、與謝に向つて物あはれに。「この身のさまでは、刀禰、うら恥かしうかりやる。」

第三十四

部屋を一つあてがはれて女の童と侍女とを添へられ、まづ事欠けぬ身にいちごも爲りましたが、胸に絶えすこたへるのは與謝小二郎の正室欲蓬のことでした。小二郎に紹介されて見参すれば相手は肉肥わて身長低く、色が黒んだ醜婦でした。女性二人の醜美がわかれて居れば互に相思み、相にくむもの。表立つては言へぬもの、たゞさへ夫がいちごをやら素生も知れぬものを引きつれて來たのが瘡

にさわる、それに、見れば相手は美人、美人、擯斥する目にすら美人、さては此身は二の町とならなくては爲らぬ。

二の町と爲つても構はぬとの發心が女性に催ほした事なら天地晦冥、人間に愛も情もなくなるもの。無くならなければこそ其處が夫婦、つまりいまで連れそつた男を人手にわたすのが否、つひ狹蓬もいちごをば目に稜で送迎するやうに爲らしました。

「何の正室を鼻に掛けて。」と、今度はいちごの方でまた邪推を運らしました。如何にも正室ぶつた處もありましたらう。が、それより何より第一はいとしく思ふ男を異体の女にわたすのがいやいふ處、その思案も付いたにしろ、初めから快くないどころ、更に勝手はい、理窟のつけいゝ方に邪推を働らかせました。「何の正室を鼻に掛けて。日本一の醜婦の身が片はら痛い、飽かれたとは知らぬのか？」

何となく憎い。憎いと思へば狹蓬の色の黒さがますます黒く見ゆる、づうくしさに顔も皮厚であるやうに見える、狹蓬の上にある瑕と言ふば分厘の未まで

も丁度よくいちごの目に止まる。果ては分限をも捻れて狹蓬がまづ禮をしなければ自分も答禮を爲まいかどまでに思ひ上りました。で、顔を見合ッても異に澄ます氣になりました。

夜更けて殿は狹蓬の方へ亘ッて、つれづれゆゑ双方でも爲やうから、いちごに來いと使をよこす事もありませんでしたが、狹蓬の部屋へ行く事と言へば一も二も無くいちごは拒みました、「病氣てありやれば。」

すると殿は劬勞にしていちごの部屋へ來て、様子を見て安神し、今度は此方から狹蓬を呼ばせると、前のかたきうち、また狹蓬もいやだと言ひました、「病氣であらやれば。」

けれど、殿が狹蓬の方へわたるのはほんの義理、有りやうはいちごの部屋にそれころ「大どのもり」して「不早朝」と詩にも詠はれたい程、今こちらに足が向いて、ろれに口實が付けば、いゝ機會にして直に入りびた。

見せつけてやらうといふ勝ち氣が元來いちごの疵、殿がかう亘ッたやと面あて半分聞えよがしに其都度々々琵琶を取って高らかに彈する、其音々、音々は狹上

もぎに血を湧かせるのみでした。

一人では狹蓬も口惜しんぼうの虫を手遊物にし得ず、母の寢室へ泣き返んで彼一句、是一句、母も意見は自分と同意ごと、書棚の金物の草いちごをも敵と見てけうさんでたゞきつぶす仕儀。

しかし母の寢處はいちごにも遠く、今彈じて居るか、ろれとも居ぬが、更に聞えず、聞えなければそれだけに苦勞も加はる、忍んで行ッて見たくなりしました。母をさしとめて自分ひとり、侍女に見られまいと面を蔭に向けて廊下を傳ッて彼はいちごの座敷、近づいて耳を寄せれば、れのれやれ！舌たるい文句を贈答して、男の身としてまぎくしい、素生も知れぬ女を褒めそやす。

「今日の湯あがりの御身のよそほひは又一入でおちやツた。」

「これは鈍ましい、いつ見そなはした？」

「牡丹を玩んであの杜若（女の童の名）と何やらむ、物語ッておじやツた。」

「いかさま然ることもありやツたなれど、殿が見そなはせしとは毫だにも……」

「知らいで重疊、名のり上げては見ることも出来ぬ風情、いかなる宿世のあッて

さ程に麗しく生ひ立ちやたらうぞ。」
 聞くにも胸は涌き立つ、爲らうことなら掻きむしつても、あゝ殿も薄情な、この身に向つては露一言もやさしい言葉賜はつたことも無うて、うして化性をばこれ迄に愛でくつがへつて。

婦人と言ふものは男子と妙に違つたもの、たゞひ双方氣に入つて婚禮してもうれからしばらくの間は深い愛情を男に寄せもせぬもの、やがて馴染が度重なるにつれて惚れがたく爲つて、終に三千世界の中、わが夫より外に男は無いと思つて来るもの、はや左様爲ればわが男が他の婦人と一言半句まじへても餘り快くは無くなるもの、

まして正妻の面前に於て化性が千話ぐるひに狂ふるれ見て胸をわくるせぬ女性が何處に有るもの、狹達の憤怒も元よりでした。

一時は夫もにくらしい、鼻毛の延びたどしか思はれぬ、新婚の夜さり、どろけるやうな笑顔を作り、また其後もまだ水入らぬ間は一寸した閑暇にもわが手を弾いたり、髪の毛を引つ張つたり、たわむれてくれた夫小二郎の前日が思ひ出さ

れる。

それ程までに可愛らしがった夫、それが今は何ごと、天魔の所爲か、悪魔の祟りか、正妻の部屋を音信れては義理一篇だけの言葉を述べて、間さへ有ればいちこの事を言ひ出す。

侍女どもに向つて、表向では何殿が来なくともかまはぬと宣言するもの、内實は矢張り来てもらひたい。来て貰ひたくも無いが、来れば心よい。来れば天晴れ此方も手練を盡くして殿をもてなし、いちこの寵を奪はうと思ふ、世辭も言ふ、自然つまらぬ、はかない、小供めいた世辭も吐き出す、ほつと思つて殿の顔を見ればさもさも不興氣な跡。いちこの方が伶俐しいと今さもさも思つて居るらしく見える。

さうかとして生娘が無言の行でも爲るやうにだんまりひつつり、御辭儀ばかりして居てはまた澄ましたと思はれるに違ひ無い。たまには脹れて見せるもいいが、此方が脹れ過ぎると、自然先方の堪忍ぶくろも裂けて仕舞ふ、脹れるのもまた善惡。ふくれないで、よくもてなし、ろして失策を爲なかつたにしろ、さう此方の氣

轉がよければ直に其顔色を見て殿はいちごを呼ばうかとさへ言ひ出す、どうも其處で否だとは言へず、あゝ七去三従のをしへが面倒くさく、

約めて言へば否だの遠まはし、いちごは多分病氣か何かで來は爲まいと言へば、猶さら瘡にさはる、殿がいゝ氣に爲つて「名ある醫師を呼ばうか。」

なせ女子と言ふものは斯う男子に凌げられるものであらうか。天晴れ與謝の一手の武士となりすましたればこそ今では心も傲つた、元は行童あがりのさすらへ人、その時に救つて宿してヤツた恩を早くわすれて仕舞ふ。

見付けられぬ内どわが座敷に早く立ち戻つての千思萬考、ところへ苦勞にして母も來る、「いたう顔色わるいぞや」と言はれると、甘たれ半分、涙がぼろぼろ。

しかし母とて何も舊身分のよかつた者でも無く、婿のおかげで今の能すまひ、で、婿に向つて充分に怨みも言へぬ。

充分に怨みが言へぬところで、素ふりで怨みを婿にしめす、折々はきりりと針を言葉につゝ、

小二郎は怒る、仕方なく狹蓬は取りさへへる。

ひるがへつていちごを見れば此方にも胸のうやもやは前に譲らぬ程有りました。第一が自分が新參であるといふひがみ、それが種々の邪推の種の一つでした。

新まゐりとして人をさげすむ己れは何か、氣に入る梶原の侍女、心得がほに狹蓬たちの前の身分を話す、あゝさうか、それでこのく、歴々の公卿をいやしむ。

せめて其顔が十人なみであつたなら嫉妬の炎も燃えさせる、あはや片輪に近い顔色をして何を女めかす！ よしや今までに正妻であつたとして持ち主の氣が變はれば仕方あるまい、あれは馬鹿だど持ち主は言つた、あれは鈍いと持ち主は言つ

た、それ知らぬか、醜婦！
なりあがりの小女郎、薙刀の作法も知らず、天晴れ與謝の小二郎の内君になりす

ます心が片から痛い。陣鉦がたちまち聞えて、武士が城外に馬をそろへる場合ひ内の覺悟をいしくも爲し得る力を持つての上の事か？

たゞ小二郎に飽きられては矢も楯も無いといふ處から粉飾は常に超えました。頬に紅を絶やさず身に空だきの香を無くなさず、朝化粧に夕ヒまひ、伽羅をそれ

ころ一度に用ゐ盡くす程でした。

その美色に添へて例の辯舌を以て、よくく夫の外交にも味を容れました。他家から使者でも来ればかならず、接待の指揮を進んでいちごが爲る、いよいよ小二郎も感心する、果は内幕の密儀にさへ味を容れると、いつか政子の故事のまゝ、尼將軍との絆名もつきましました。が、うの絆名にいちごは大得意。付けられた當座は其絆名も楽しみにしてさながら咒文の何かのやうに口ずさみました。

第三十五

きのふ今日杜鵑を待つ夏のはしめ、綏子張りの窓に映る青葉の色も翠の露を凝んで何となく愛らしく、若藻をわなゝかせる小魚の腹も時々はひらひらと輝いて見えました、小二郎は野を坐あるきして道に一人の老尼に逢ったとやら、武士二人ばかりと共に出るより早くその老尼を伴つて歸つて來ました。この戦國、僧に身をやつして敵情を探るものゝ多い世の中、よしや女にしろ、うかどは信せられまいと差し止める武士の言葉を用ひずに連れて來た、其處に子細がやゝ有つたのです。

はじめ傍道にうの老尼が憩つて居たところを通りかゝると、しばしと袖を止め

ました、そして小二郎に向つて卒爾ながら問ひまゐらせた事があるとの趣き、何事かと聞けばかう言ひました。

「いと面なけれど妾はさる公家の片われにて、家無うなりて、尼となり、失ひし娘を尋ぬるものでありやる。」

と言つて今までに何人とも無く、わが娘を知つて居るかど人に尋ねくゝて來たこの事、その娘の名はと問へば、「いちご」と答へました。

さては是がいちごの母かと胸がつぶれるばかりに小二郎も驚きました。どう答へていゝか、殆ど思案も一時は付きませんでした。が、見れば尼の体の如何にもあはれ、海藻のやうに掻き垂れた古布子を、如何に夏とは言ひながら唯一枚まどふと言ふ名ばかりにして居る体、それに婦人の愚痴の多さ、今までに娘に迷つてから諸國を遍歴して餘命をつないで居るとかき口説くところを見れば、さすがに見捨ても爲りかね、どうにか後に工夫もあらうと思案して、それならば一先わたしの館に來い、心あたりが無いでも無いから授つてもやらう、それに身のなりも淺ましいからせめて一夜とまらせて、どうにかしてやらうとの旨を説き聞かせ、

それから節へ件つたのでした。

歸るや否や、老尼をば一間に休息させて置き、直にわが居間にいちごを呼んで事云々と説き聞かせる、さアいちごの顔色は變はりました。

半は信じました。むしろ充分に信じました。が、未練なもので猶問ひ正しました。顔つきは？物どしは？しかし何うしても間違ひは無い母でした。

久しぶりゆゑ懐かしさも懐かしさ、しかし今更おいそれと面會する事も出来ぬ、どうしやうかと思見を小二郎に問ひました。

「どうぞ詮無い。御身好まぬならば逢はでも宜からう。されど、伴ひ來つる甲斐には然るべき事無うてはならぬ。こゝろあたりおぢやらぬか？」

「心あたりとて更にたりやらぬ。殿、よきに料らせて、妾は衛も思ひ出し得ず。」

「さらば詮無い。身が宜きに取り料らはうす。」

考へて「かう爲やうす。今宵身が人を遠ざけてかの尼と物がたりして斯う言はう、いちごとやらん尋ねしに過る頃まで尼に爲りてこゝらわたりに住たりしが、今の何地へか影をひそめて見えすなりしと。それに付けては何となうなぐさめて

得させう。御身もくるしからずば顔の際よりかいまみやれ。いかに？」

一も二も無いいちごも同じました。やがて夜とも爲りました。さアいよく其刻限でした。

思へば身も世もあらぬ心もち、いちごは殆んど泣き出したく爲りました。今までに折々は自身わが不孝を思ひ出して影ながら父母に諛言をもした事が有った

が、淺ましい、母が回國の尼に爲つたとはつやく思ひ掛けなかつた。かはり無く、よしや事足りぬ勝ちにせよ、内裏で舊のまゝくらして居られる事とばかり凡

夫の身が思つて居たところが怨めしかつた。が、今と爲つて——われながら憶病

ながら——どうも面があはされぬ。不斷から父母を凌ぐばかりに廣言を吐きなれた身、その前の廣言に對してどうして人の側室に爲つておめくと母に見參が出來やう。

それにして男と言ふものは氣のつかぬもの、伶俐いけれをも小二郎が或は打ち明けていちごが居ると言ひは爲ぬか、と思へば氣も急ぐ、直に小二郎のところ

居くさる。

氣の所爲か、狹蓬がいちごを見て、見ろ乞食の親が尋ねて来たど冷笑するやうに見ゆる、にくらしいと思へば鼠眼にもおのづから角が立って、すさまじく尻目でじろりとヤッて、さて小二郎に面つた物のこゝで憎いもの、聞く前で頼のひも否でたまらぬ。世話を爲る侍女は殿の小袴の裾なを拂って居る、さア言ひ出せなく爲りました。

思ひかへして見れば何も小事、その位の目走りの利かぬ小二郎でも有るまいと、われから苦勞に口おさざるを與へて其儘何も言はぬ、其内心、うれを知らぬが佛小二郎はいちごを摩いで、「喃、來て聞きやれ。」

「わらはも参りて怪しうありやらぬか？」と、まア呆れた、人の苦痛を玩び顔の狹蓬がいひくさつた。まことに早身は心裏恥かしさの毒刃で寸々にきりさいなまれる。

たまらなく爲つて差し止めてくれると殿に目くばせする、その目を快くも見て取つて狹蓬は猶殿に迫りくさる、一殿、いかに？」

「殿、早う來ませ、啓へぬ内にといちごは急かせる、狹蓬もきよ續つきまどふ。これは怪しやいちご……こ……こばみやるか？」

「こは？内には何を仰せらるゝ？妾がこばみましたか？」早語氣はあらく爲つて。

「こばみやれ。」思ひ切つて冷笑しました、「こばむ！さも然らす。乞巧の母君がまゐりしかば……」

聞き捨てられぬ斗りの冷かし、赫としました。しかし狹蓬に取つてはまた一理屈ある事、今まで殿がいちごを庇つて一言も此方に許すと言はぬ、それが憎く爲つたからでした。乞巧の母君と言ふや否や、附き添の侍女は一同に噴き出ししました。狹蓬に取つては其心よさ、いちごに取つては其口をしさ。

聲を呑んで一言も無く、用捨も無くて顔に袖、もう何うして悠々として居られましやう、隙見などして。「殿、御免さうらへ、しばし妾は。禮するや否や引きかへしました。廊下へ出るや否やわつと一聲。小二郎も氣は氣でなくなりました。一二言何とか言つて狹蓬を叱り飛ばす間も無く、後を追つていちごの部屋に來て

見れば身もだえをして泣きこぼして居ました。

「いちで、心そねつらう。ゆるせ、身に免じて。身が後にせうとも爲う。他事ならば家業にて事済めを御身にかゝはる尼なれば身が直々に對面するのぢや。それも有ればやがて立ちかへる、心な屈しぞ、暗いちで、しばしくしばらく待ちね。」

うつむいた許り、有難さうに手を合はせるいちでの体、見ていよく不愠をもよほしました。家は歴々の公卿と言ふに時世とは言ひながらこの姿か？如何にも相思の情がこまやかでした、馴染んで知って居るいちでの氣性、くやしいあまりには大事をも爲かねぬ風、それも苦勞、武士に心を得させて氣をつけると命じ、心を殘し／＼出て出た例の尼に對面しました。

で、前いちでに打ち合はせた通り好い加減に蛇の生ころしを傳へました。可愛相にも眞にうける老女、立てつゝけの涙を話しが切れては猶多く涙しました。何か搔ぎ口説く、其聲はつものり／＼た浮世の苦勞に暖れて秋の蟬同様、一言で咳、二言で痰。

一時は部屋に立ち戻つても流石にいちでも親身の情愛。今頃は小二郎が老尼と話しを爲て居る頃と思つて見れば亦聞きたくも爲りました。さしとゞる武士をもに辨解をこま／＼爲てやゝ近寄つた一間の横、襖の蔭に身をひそめて、さて聞いでは見ましたが、そればかりでは満足が出来ず、やをら襖へそつと手を掛けて浮かせて敷居をすこし這らせました。

のぞいて見れば、ても無殘、如何にも綴はぬ母でした。如何に零落したと言つて是程とは！まことに乞食のまゝでした。昔は色白どの評が有つた人、似氣なく今は雨風に黒みはてました。それで小二郎に向つて搔ぎ口説く、其言葉を聞けば一々斷腸の種でした。

親切に甘えて始から末まで話すいぢらしさ、はじめいちでが不隨庭を散歩するどて立ち出でたのが此世の名残り、影も形も無くなつた、それからいふ物は家は闇、父の夏代の元々氣のいゝ人間、自然心も弱い方、苦勞に苦勞を重ねた末は終に思ひ病みに煩ひついた始末、折々風の便りに聞けばいちでは死んだとも言ひまた義政の方に行つたとも言ふ、いちでの不斷の氣買から考へれば義政の方に行

つたといふのは真とも思はれず、多分は死んだのかと座に推察を固めればたと涙に掻きくれる斗り。聞けば宮廷の混亂は前日よりも甚しく、小君さへ發さへ何れへかやはり見えなくなつた杯評浮を傳へるものも有る、それでいくらか味方をも得たやうな心持ち、たゞく神佛に向つて苦勞に骨と皮とになつた指を打ち合はせて愚痴か願ひか吾もわからずせがひばかり、其内に夏代の病氣は次第に重くなつて、果は頼みも無くなる仕義と爲つた、爲つてそれで、さア見て居られやうか、いちぢ、といふのが口つゞけ、この四十女の妻をさへつかまへて血迷つた目でじつと見て「あゝいちぢ、よう歸つたぞや。」

終にはかなく爲つて見れば、もう浮世に望みも何も絶え果て、せめてはと思ふ空だのめに家を捨てて回國しやうと志したその事、一任一任はすなはち是、たと其後が聞くに忍びませんでした。

泣いてく泣き死ぬ程、尼はいちぢが襖一重の向ふに居るとは知らず、

「殿、かう歴めやつて甲斐あらすば活ける望みも妾は持ちませぬ、御慈悲、御心あたりだにおりやらば一目は逢はせて下されよ。世の中に親の罰不幸な子の上に

掛るとか、よしや親に苦勞とする子はにくくもあれ、妾はいかで罰を中てまじやうか、罰あて、親子永劫相見さらば…嗚この胸ぐるしと御推しはかりやれ、嗚…憎くとも罰は中てまじ、大事無いならこの母がいかにも罪詫ひうするに…たゞたゞ一目逢ひしならば此世の望みは足りておりやる。」

さしまねぐ手元を見れば立枯の雌松の一枝、色も無く荒び果て、痺せ果て、

…ちッ!

襖影で現在見て居る身の苦痛。あゝ可哀相、れいたはしい。此身の心得ちかひら一家が斯うまで離散して…ま、何うしたらこの言譯が。不孝不徳の妖舌にそもそも迷はされた身の發端、浮世の門出がすなはち邪路。因果は運る水車の輪廻とはよく言つた!

許して下さい、母上さま、御目に掛かりたいは元より山々。しかし、身で身を願れば。襖一重が血肉分離の罫の扉、生憎に襖は金の水の月形、猿猴が真如をあやまつその、その辻占。

天晴れ面目ある身にさへ爲つて居た事ならよしや御叱りを受けやうが、よしや

平生の慈眼に引き受けて「あのれいちご、寄せ付けぬ」と仰つても我から進んで御怒りの解ける迄泣き付き、口説き付き、すがり付き、只一目でも御見には入るそれが出来ぬ身の因果、親の身を——今さら知つた——汚して、はづかしめて、勝手に放り出して、今までの経歴を思へばよくもく影ながらでも親に逢へたもの。それとも逢はうか？ 逢つて一言なぐさめやうか知ら。この袖一重を一推し推せば、顔を見せたら！

第三十六

袖一重を開けて顔を見せたら、ま、どう、取り付いて、抱きかゝへて、さぞ憎くも有つてまた——嬉しがられる事、世の中の痛苦の浪風に瘦せさらばへた御老體も天晴親身の情熱に血を増して——あゝ、思へばこの側室一つを見限つて、名唱り合つて諸共に讀經三昧、母子つれだつて岐王の昔しを真似やうか？ つらい、かなしいと言ふ事は今はじめて知つた。なる程浮世は六かしいもの。さすがに興謝の小二郎は男だけに、また他人だけに感じも鈍く、見たところいちご自分ほゑには血をさわがせぬ體、他人と言ふものは斯う言ふものかどさて憎

ますともい、物までが一寸小にくらしくなりました。こゝにいちごが居るとの事を知らずに居るところがいたはしい。どつたい胸は思案に湧き立ちました。その内に老尼は頻りに小二郎の顔をながめて居ましたが、思ひかねたと見えて口を切りました。

「やさしく仰せてたまはるだけに御いたはしうありやる。つき無き事問ひまゐらするやうなれど、殿には何方の御うまれでありやる？ 産れからこゝに御すまひでありやるか？」

「うまれから此處のすまひではありやらぬ。生れは京都とやらん、されど父母を知らねば何も知らぬ。」

「父母もありやらぬとは？」

問はれて小二郎も膝を進めました。

「いかに尼公、御身も佛門とあればそれがしも打ち明けて亡き人の菩提を御身に祈らせう。まことを言へばそれがしに父母は無いのちや。有つたものゝ、身は知らぬ。いとけない時寺へやられて寺にて育つたまゝ親は知らず……」

尼は聞き耳そばだてました。

「寺とは？ 京の加茂の草の庵ぢや。もと何とか言ふたよし、身が物心覺えた頃には閑蓮庵ととなへた。」

「加茂？ 閑蓮庵？」

おどろいた體、不審と小二郎は子細を問ひました。

「何れどろく？ 思ひあたる事があるか？」

尼は猶豫なく、

「こそし、打ち付けながら何歳召さる？」

「甘と五。」

「甘と五？ まことでおりやるか？ 扱も……………」

と言つたぎり後は涙。

「殿！ 外れる槌かは知り申さねど、殿は妾の……………あな空恐ろしし。」

「うこの何か？」

「子ッ……………」

「子？」

あししづみながら尼は手で小二郎の顔を指さし「怪しかる事よと思ひ居りました殿の面ざしがいそいたう口き夫の夏代に似たるのみならず、餘れもせぬ、その御照の下の黒子……………」

「はてこの黒子が？ まことにか？」

「今そら言申したとて詮はおりやらぬ。何とか寺にて聞てし召された事はおりやらぬか？」

「まことぢや。言ひ傳へて後の師僧から聞いたこともあつた、身はさる公卿の落し子ど。親の名までは聞かざつたなれど、公卿の子とはたしかに聞いた。これ尼黒子にたしかに見覺えあるか？」

「まことでれりやる。この、かしてけれど、この妾が産みまわらせた人でれりやるを…黒子のみかは殿の御ありさまは今妾が尋ね迷ふいちごさようも似通ひたまふ。」

この一言は小二郎の胸には毒箭、他は知らぬ苦惱がひらく。

では、畜生！ いちごは、嗚呼天地神明、現在肉…肉身の妹か？
つねに動じやすくなかつた身も五體は生熱、倫常の針につゝかれる身のくるしさ。何さま尼の言葉は嘘とも思へぬ。嘘ならそれ程の事は無い、が、一々ひしくと思ひ當る事も有る、人もよく言つた殿といちごを面ざし似通つた。さてもく人の道をどうしやうか？

胸がほとんどわるゝ爲る、身がふるへ出す、見る目がわれからたまらぬさうか
とて打ち明ける事も出来ず、あゝ夢なら覺めてもくれる。鳥、獸、犬、畜生！、力も無い一疋の老尼が何か神聖の威を放つて此方を叱りこなすやうに見ゆる。
返答は無くてどつおいつ、しかし思ひ付けばこの子細を人に知られたらそれこそ恥辱のまた恥辱、次の間あたりから漏れるかも知らぬ。と思ひ付けば工夫もつく、無慈悲ではあるが、今の母の言葉、それを掻き消して仕舞はなくては爲らぬ。
正に思ひあたつたのは血筋の恩愛、それと分からぬ内から猶この老尼に限つて何となく慕はしく、その慕はしさの餘りにつれ戻つて一言半句交へれば交へる程また言ふに言はれぬ親しさ、なつかしさも加はつた、その母、實に天にも地にも

只一人の母、生まれ落ちてからやうく始めて其顔を知つた母、まだ思には浴せぬものゝ流石に慈愛のところは其顔にもあらはれる母、それがどうして突き放せやう。それも母が人並の世わたりを爲て居ることなら格別頼みとする夫も無い哀れども慕ないとも何とも角とも言ひやうの無い身、そのかよわい物を見すく知らず顔にもてなせやうか？親子だぞわかつて熱涙に身をわなゝかせて其下から嬉しくてくたまらぬ笑顔を密と洩らした、その、而も年老いた、なつかしい人をとたゝ無情に追ひ出して仕舞へやうか？いちごが見たら何と言ふか、聞いたらうもく何と言ふか？

いでと決心して逐ひ出したその行く末を思つて見れば、あゝ九腸寸断や々、母は吾子に逐ひ出されて霜白い秋の夕暮、山風を衣に受けて聲細く鉦をたゝひて人に合力を乞つて歩くこと、その途には病氣でも起つて、そして浮世の何處に眞の子が居るかも知らずに居て、またそしてはかなく草の蟲と泣き死んで仕舞ふこと、その亡骸は誰が拾ふ？犬の腹、鳥の口。
しかし何うしても亦思ひ直せば、凡夫の心かも知らぬものゝ、身の衆生を人に

聞かれて大變といふ心持ちもしました。素生、たゞその老尼がわが母と官ふだけなら構ひません、が、いちごと自分とが兄弟であるなどいふ事、それを人に聞かれて快くありません。

それも浮世に望みが盡きてそれから後念佛三昧でもして身を送らうといふ考へならば兎も角、猶成りあがらうとの大望もある身分、とかくまだ世をば思ひ捨てられず、捨てられぬところで醜聲を臣下に傳へるのははなはだ心づるしい。

ひとたび孝心以外に目的を置かずに考へて見れば矢も楯も無く母があはれになるものゝ、更に忿心を土臺として考へれば理が非でも母をつれなくする氣に爲りました暫時ながら今の小二郎の胸はどの二つの情の争ひでした。

まして感動の鋭い女性の身、一重の襖影で一伍一什を立ち聞きしたいちごの心中、さて今日は實に夢また現。はじめ餘處ながら母を見てさへ胸は麻のやうに亂れたものを、今聞けばまた意外と言ふも愚なこと、われどわが顔が冷えて氷のやうに爲つたのに氣がつきました。

どうかと思つて小二郎の顔を見れば是も當惑の體もこそと推せば推すほど感

動もまた深く、はては其座に居たゞまれなくも爲る、爲るものゝさて其後小二郎が何と言ふかも知れぬ、それ開かずに戻るのも亦殘念。

が、また無念、あゝ折りのわるさ、狭蓬も立聞きをしに來ました。

いろ／＼に考へ直して見ても浮世の大望は去らずつひに小二郎は素氣なく母を待遇する氣になりました、まこと、根からの不孝の心はさらく無い身、それでいざ虐待しやうといふ場合ひの胸ぐるしさ。虐待の文句は口まで出てまた幾度かためらひました、しかしどうしても思ひ切らなくては！

きつと爲つて眼をいからしました。

「尼ッ！」

是ほど駭く母の顔、眼を睜つてさる／＼吃驚。あゝいぢらしい、それを吃りつけなければ爲らぬ。

「舌長いぞ、最前から何言ふかと空耳つゞせば今何とぞ、身をば己が子と言ふとは——證據も無きもの何かせう。白痴言聞くべき小二郎か？ どう／＼此處を立ち去れよ！」

「たは言？」と言ッただけが尼の關の山。

「たは言ぢや。うれかと思へば詐りて已か言葉を導いたに、乗りかゝッたが鈍ましい。そら言言はれていで應と従ふものと思ッたか？ 去れ、立ち去れ！」
尼はいよくますく意外、涙もやんで當惑顔のその哀れは。油鍋で煮られる心持ち。

「立たぬか？」叱り飛ばして身を起しました。ぐすくすれば飛ひかゝりさうな見脈。尼もいくらか不審を催しました。して見れば目違ひか、他人の空似か、別人か？ とは思つたもの、それながらまたその他人でも、別人でも香子に似て居るからは猶戀ひし...

「殿、飛びすさッて手を合はせ、斯う...斯うでありやる。過言かも知らず、その程は、しばし殿、尼が老いさらばへた處と御見やつて...これよ、殿」それだけでわッとしりぞき落とす悲歎の絶頂。

いちごらしいと言はるか、可哀さうと言はるか、見る身が錆刃で寸分にためされる。襖でしのいちご、是も同様まだく凡俗、飛び出す程の勇氣も無く、忍びに

忍んで齒をきりく。

泣き落して尼はぢれつたさうに一人で身ふるひ、碎けるかと思ふ齒きしり、

「殿、かしてこの言葉ではありやれど、よしや他人でおはせばとて我...我...我子に似かよひたまふた上は、あどは涙かすなはち言葉、「戀しうてく。」

「まだぬかすか？」

どは言ッても流石に恩愛、兵どもを呼ぶ氣力は無い、ところを尼はまた一言、「なさけでありやる、申し殿、こよひばかりは切めてこの御館にどめさせられて...」

あゝこれがさうして素氣無くされやうか！

第三十七

一間の中でさめくと泣いて居るのは前の尼でした。その部屋には我より外にたれも居ぬところ、目的の無い目を隔ての蒸し襖に抛ッて怨めしさうに其處をながめて居ました。

どう思ひ直しても他人では無いこの館の殿。珠王が分からずに兎角うたがはれ

るのも前生の業因か？空似と言ふことも有るとは聞いた。常夏と河原なでして似ても別とは知る。たゞ何と無い親身の情愛。血筋の縁は煙のやうに手を出して二人の間を導いて居る。のみか、顔から聲から様子までこの目が現在見た、この腹が現在やとした其人と瓜二つ、何處に居るもくいつはり有らう。無いとわかッて先方もそれ知ツた體。うれであゝ無情。あゝ天地神明にも見はなされた。とてもこの世に最う望みは無い。

産み落とした其日は大つてもり、物の怪異が有つたとやらで陰陽師が邪魔を入れて罪ほろぼしに親知らずで寺へやらうと言つたその時、念れもせぬ、まだ初めの男の子を藁の上から人手にわたす心のくるしさ、また再會の日も有らうと些しばかりの紀念をあたへてうして黒子をじつと見て、是が何よりの證據だと念じ覺えた現在この身、その身がこゝに四十年、わすれもせぬものを、あまりと言へばつれないいたり。涙にかきくれたにしろ、まだ目は黒い。この黒い目でそれを見ながら、それと思はぬとは何の因果。もとより捨てた子、鄙の男の手にわたしてそれから寺へやられた子、それに向つて親めかすのも些しはかたはら痛い譯

たゞせめて一言ぐらゐ、多くは入らぬ、たゞ一言うち解けてくれたなら生きながらへた甲斐も有らうに。

それが無いとはよくく不運。内裏の大亂、一家の零落、やうくで尋ねあつた意外のわが子、よしやいちごには逢へずとも、それでも吾子はやはり吾子、やれ嬉しやと思ふ間も無いとはさてく運のわるい。

かう運のわるい身の何處に有達の顔が有らう。もう世は是で盡きて仕舞つた。何たのしみか世に有らう。思ひ切つた方がいゝ、或は死んだかも知れぬいちご、もしも左様なら冥道でまた逢へる。まだくそれが楽しみ、この世に何がたのしまれやう。

あとより血のなみだ。目をねぶッて合掌観念、一間の風も死にました。

夜しづかに窓からさしのゆく新月ばかりが物のあはれを知り顔、蒼ざめた色の影も薄く、縷子ばりに目を近づけて外を見れば黒すんだ木から雲だつた空いづれも死人色をして居ました。

あとなしさうに照らしてくれて居る短葉、溜息に驚いて程經てぶるく震へる

外はじつとして今や一風を待って消えやうといふ體。あゝ是を見ても未練は起さ
れない。萬事望みが盡きた以上は、いざ短樂、油が盡きた上からは風を待たずと
見事に消え行け！

兎に角に一夜の宿を借りたのは恩、その恩を仇にかへす法は無い。思ひのたけ
を紙にのこらす、笈から取り出す硯に――涙を注ぐへても堪へられる――墨をす
りながすの墨と共にみじかい命――

「さりとてはつれなき御ころかな。わかれまゐらしてより親ならねを親のこ
ろは燒野のきすのたどへも引き出でつべくなむ。道にて見せしが命にて
まことのかよはぬはさきの世の事を思ひ侍りてこれをかぎりになくなり侍る。
たゞせめてもわが子としいふわが子の一人に逢ひまゐらせしが心やりにて、
あはれ永劫すくよかに過ぐさせたまへと念じまゐらすばかりに侍る。さりと
て名のらせたまはぬにや、さりとていまだ得さどらでたはすかは知らずは
べれは何事もさだまる世と思ひなせば誰をうらむるよしもなし。何となうほ
とく世の中つらうなり侍りしまゝ思ひたちしをろのまゝにいちごにも逢は

でなり侍る。あなかして。

京尼

君

進上

書き了ってほつと一息、紙をたゞむ間はよし長かつたにしろ知れたこと、まし
て手間も無い間、ろの手間の無いだけみじかい命、血なぞ見せるのは流石に否、
聞けば庭の向ふに轟く泉水の音が聞える様子、ろこそと目ざして屹と身をつくら
ひました。

身をつくらつてまゝ悪びれぬ方ながら、さすがに涙はやはり湧き起つ、かつ拭
ひ、かつ擦つて鼻をもかみ、もう世には久しくない目をあげて上を一目、そつと
襷を明けてじづかに庭に忍び出ました。

かれこれする内新月はすでに傾いて夜はおぼろに爲り、水ばかりは地よりも照
すんで見えませんでした。

就て見れば形ばかりの泉水、なか／＼死ねさうも無いやうす、死にたさに失望

しておらくと足を移す内にいつか繁った森に來ました。

人影もわからぬばかりの森、兎が居たとて見えもせぬところ、聞けば今死なうと言ふ身にもさすがに氣味のわるい、人のうめく聲。

ぞつとして、何いふと、二三歩退きかけてさて更に思ひかへして近よつて見て「何もの」と聲を掛けて見る、と相手は瘰に閉ぢられた少女でした。

見捨ててもなりかねて介抱し、子細を尋ぬると少女は斷續した言葉のうちからつまびらかに答ました。その答へ、尼には思ひ當りも多く無い方、しかし思ひの外でした。その少女は即ち窟子の庵室に近くあつた白屋のもの、はじめ男すがたのいちごを見て人知れず戀ひこかれ、やがて窟子とのしかくの關係を聞き、はじめて驚く中に、今度は更に窟子を戀ひろめて折りがあつたらばと思つて居る矢先いちごからのまはし者に窟子は刺されて、その淺痕が終にもととなつて墓なく爲つて仕舞つたとの事、いちごに怨みが重なつて少女も其儘にして居たところ此頃此近邊にうつり住んで産婆など賣る道で昨日とか一昨とかたしかに其邊でいちごを見とめて、やがて妙な一心、よくく深く窟子を慕つて居たことゝ見え、いち



とに逢ッてその怨みを述べやうと志して居て今日も夜までいちごを尋ねて居たとの事でした。

兎に角に一概にも信せられぬ言葉、しかし其處にのぞみの有る尼の心は動きました。

未練なやうながら死ぬのがまた一時をしく爲りました。こゝらにいちごが居る！こゝらには何處かど無益ながら根ほり葉ほり問ひ正して、さて臆くも自分の素生も明かして諸共にいちごを尋ねやうと決しました。

はやもう其處邊にいちごが見ぬるやうな心もち、女氣がさへかへりました。さて是から何處へ行かう。方向がつかなく爲りました。

人を伴ッてまさか人の館へはかへれず、さうかどて野宿するのも否、書き置きを残したのも氣にかゝる、一寸思案がつきかねました。凡夫ゆゑ仕方無いで、たゞしかしめて風のたよりにも現在自分が書き置きを残したその館に尋ねる人が居ると知ったなら。

少女の家を聞くと此頃この近處に移ったとの事、ろこに行く氣になりました。

今に爲ッていくらか變なもので與謝小二郎がさして前思ッた程でもなくなッて、よしや書き置きを見たにしろかまはぬと心を決しました。だが、世の中は兎角意外に行きたがるもの、その書き置きをば小二郎より何よりいちごが見ました。

小二郎が恐嚇して老尼を一間にねしやツた、その後は自分も一間に籠ッて夢に夢を見るばかり、呆れが半分、耻かしさが半分、つねの大膽もこの時は打ッて變はッてほどくどつおいつの思案にくれました。小二郎が何とか言ッて来るかとは思ふもの、今さらその顔を見るのも耻かしいやう、夜着にうづまつてやゝしばらく泣きに泣きました。瘧も起ツたか、胸先きから掛けてきやくして來て、頭はほてッて燈火も黄色に見えました。

たまらなく爲ッて母はどうかと隙見をしたく、やがて窺と忍んで母の入れられた一間に近よりましたが、さて此時は前に尼が死なうと覺悟を極めて其部屋を立ち出たろの餘程後でした。

何も知らぬ身の罪も無く、どうかうと考へながらやゝその襖にさしよッて隙見

して見ればこれはいかに尼は居ぬ體。

短禁ばかりがまじくと照ッて居ました。

おや。胸をツきり。それとも用でも有ッて出たかと思ッてやがてそのあちこちに目を配れば直に書き置きが見付かりました。

何とも上書きは無いものゝ、よしありさうな筆の跡、たまらず中へ駆け込んで手に取るより早く短禁の下、封を開いて讀んで仰天。むウんと口を結んで無言でしばらくは目をみはる、更にまたふたゝび飛びくにくりかへして讀み過ぐして、その手紙を懐中へねちこみました。

口まで出ました、人に言はうかど。しかし恥ぢの上ぬり、それも無念。まゝよ自分一人でまだ程も無いこと、追ひかける!

飛ぶやうにわか部屋へかけもをッて手にあたツた被衣をどるが早い、ふわりと打ちかけて横庭へ。庭の方より外に出口の無い尼の居た部屋、てつきり行くさきはこの方と暗を恐れず飛び出しました。

われをあざけり顔の泉水の音!

え、殘念、遅かつた、もし一足早く来たことならやみく／＼抜け出させは爲なかつたらうに。今ごろはもう死なれたか、いま死なうと爲される處か！ 氣は悉く。石にはつまづく。木の根は乗り地で足をどめる。赫々と血は頭へのぼりました。何處！ 其處！ 此處！ 木が有る、あゝこの木でも首はく／＼れる、石があるあゝこの石でも頭はわれる。水が有る、あゝこの水でも溺れられる。水か、石か、木か、刃物か、何をえらむで御覺悟なされたか？

いつか袂衣は風にうばはれて、うれもわからず、浮き足で其處此處と無く全く血まなこ、終にはつかれ果てました。何處まで来たかは自分も知らず、何と無く頭の上から化け物が来て自分をおさへつけて是でも歩くかど攻め付けるやうな心持ち。

身のいたさ、かゆさが何だか大抵わからなくなりましました。捨て石に腰を掛けてしかも夜半、つかれが恐怖を殺したか、平氣で茫然となりましました。

どうも何とも角とも言へぬ心もちでした、肩も張るやう、其肩を打つといくら強くてもいたくも有りませんでした。母の事は捨れたやうに爲りました。いつし

か生まれ變はつたやうな氣もしました。たゞ今のところ夢となつて腰を掛けた儘になりましました。

第三十八 大團圓

きやきやと鳩尾からかけて石礎をうつやうな痲といふ鬱氣のかたまりは獨り婦人にのみ限ると思つて居た身が今それを實驗しました。動もすれば胸さへわるく爲つて居ても立ても居られず、あゝ不徳の責苦といふ物は是程に恐ろしい物かと觀するに従つて五體が縮むやうに思はれて、常は大膽が自慢、敵五六人、首十二、屠りたふし、千切り取つてもいつう心よく思つた身が却つて柔弱の心の鬼に呵責を受けて、見れば見る物毎すべて身を責める敵でした。

短檠の魔風にわな／＼いて其眞如とやらいふ光りも薄く、しかもつらく思へば其光りは品ころ違へ、其人との夜半の睡言の折り、二人を照らしたのと同じ物、つひ思ひ至れば夜寒のためでも無くて肌には粟粒が湧きました。

煩惱と言ふものは始め人を樂しませて終りに人を嘲弄するらしい、いちごに迷つたがそも／＼煩惱、迷つた間の其たのじさ、それがさて今と爲つて見れば身の

置き處もなくなる大苦惱、むかし煩惱の誘ひの餌にさうはれて今は其餌を呑めたばかりで其圈套で不潔の身體を無駄にもがく、是も何も魔——魔に魅入られた事。魔に魅入られて魔と爲り下がって母をさへ虐待した！魔に魅入られて魔と爲り下がって今さへ其煩惱をにくらしく思ふ、煩惱に負けた身をばにくらしく思はぬ！

悟らぬ内は闇が一层、其闇の濃いだけに悟った氣も亦濃く、ひるがへって目を世界に抛れば兎角われをさいなむ物ばかり、物、それに抵抗する氣になりました。蒸し襦がするくと開いて侍女が先きをどほして今内君がわたると傳へました。狹蓬に來られて何がたまらう。と唯思っただけ、しかし我は知らぬもの、逆上は爲て居たこと、思ったとけでむらくと爲りました。

人の心も知らぬ女郎！われを嘲けりに來くさるか？きりくと齒をかみ鳴らしてすつくと立ち上った其面色、怒髪をかさまに針を突いて血ばしした眼が煙々ど光りを射りました、手燭を持ってまづ第一、主を案内して來て侍女を見るや否や身がふるへました。其女は年十六ばかりの可なり

な美人、殿に會釋をして微笑した、その微笑が小二郎には全く冷笑としか——あのれ、やれ、無禮な小女郎！何かこみあげる不満、不平ぢれつたさ！

血色のかはつた殿の様子、これはと驚く侍女の前はや小二郎は飛びかゝる、さてはと仰天、手燭を捨て、引きかへさうとする處を無殘、柳の腰車を横なぐりにたゞ一大刀。

「うもく是な、殿、御狼……」籍と言ひ切らぬ間、またつとく侍女が又一大刀、眞向にかぶつて一たまりも無く倒れる上をふみにちつて襦を倒して

「あのれッ、狹蓬！」

あはや打ち下す一大刀に狹蓬は殆ど眞二つ、からく飛びすさつて轉げながら、

「殿ッ！殿ッ！」

「何をあのれが！」

理も無く飛びかゝる夫の見暮、あなやとばかり手近にあつた手燭を取つて早速の目つぶし、相手の怒りはますます燃え立つ、手燭の紙に火もうつつて廊下にひらく金華を噴く其上をふみくだいて大喝一聲、狹蓬の肩から掛けて鐵もくだけ

ろ！あたりを振りかへればもう人影も無し、聞けばとよめく鐘の内外、さア一大事！咄嗟の間考へて見る、何がうらみで狹蓬を斫ったかはさア自分ながら分からぬ。取りのぼせたのです。

茫然と立つところへ駆けつけた家臣の面々、押ッ取り刀の仰山らしい。それ見るとまた気がむらく、おのれら郎黨、主を殺しに推参したか？

疑ひの王、邪推の頭、とりさへやうとする家來の體がいよ／＼ますます小狼にさはる思ひ切れやと二三人掛け聲もろとも斫り捨てました。

すはころ殿は狂氣した、組めや面々、斫られなと左右から組み付けばいよ／＼ますます／＼修羅が燃え立つ、おのれら狹蓬の味方よな。

こゝ一期の大切處、あたるをさいはひ薙ぎ立てました。どうしても手には合はず、家臣は空しくしばらくとよめく、その内一人か刀を抜きました、――

「殿とて非道な狂氣の亂人、もう活けては置かれぬ。覺悟しをれッ！」
後は一度にきらめく劍の電光！

* * * * *

あはれ道も何も無い世とて小二郎は終に朝露をまたずに消えました。早鐘は上を下、思ひ／＼に家臣の面々はいちごと尼とを探してもかいくれ見えず、ろれでは外かど手を分けて尋ねまはった庭の果て、石に腰を掛けて居るいちごを見付けました。

むらくと走りよるといちごは見て、動きもせず居る、ところへまた一群が老尼と少女とをつれて來ました。

書くだけが愚痴、いちごを一目見るや否や老尼は飛び立ちました。また言ふだけが無駄、いちごを見るや否や少女も飛びかゝりました。一方は恩愛の情に、そして一方は怨みに飛び立ちました。

この一刻が老尼や少女には洵に夢、老尼はいちごにすがつて泣き出すばかり、少女は気がまよって側にうろ／＼するばかり、しかしいちごの様子、それが奇妙でした。

母を見ても路傍の人、前にはあれ程に氣をいためたものがさながら知らぬ顔、また小女を見ても同じ体、顔が毎より甚しく蒼ざめて亂髪の垂れ下りを拂はうと

もせず、そして諸人を見て平気で小歌をくちさるんで居ました。
 男ももさへ小氣味がわるくなりました。此間からのかよわさうな光りの月の餘
 光が猶うつすり西山に残つてうして館の方から吹く風は薄なまぐさく傳はりました。
 た。

寂として一言も無く、暫時こゝに人語が絶えました。今の今亂撃突戦が澄んだ
 ばかりのところ、うれでまたく意外の女性のこのありさま、滋味には恐れぬ身
 も思はずぞつとしました。顔だちはいつものどほりで、たゞ氣のせるか、すまし
 は瘦せたかとも思はれるやう、其美色がいよいよ慘澹の色彩を放ちました。

いちご御と聲をかけて見ても猶平氣、けれと構はぬと一人が肝を据ゑて言葉み
 じかに今小二郎を殺して仕舞つたと物踊りました！

尼は忽ち泣き沈んだ顔を上げて目を見張つて居ました。しかしいちごは猶無感
 覺、髪を指の先へからんて手遊物にして居ながら其は多しを聞き終つて……に
 やりと微笑。

取り巻く一同、ふたゝびぞつとしました、思はず互に顔を見合はせる、しかし

相手は猶平氣、かまわすわが股なぞ人の前で掻きながら思ひ切つた高わらひ、そ
 して一言、「妾は是より大内の女御ぢや。」

氣が抜けて擬勢も去り、手の出しやうに思ひつかず、やがて見れば老尼はいつ
 か氣絶して死んで居ました。又一驚、少女も泣きたふれて居ました。

今夜この一刻が醜陋の大醜陋、主は殺す、尼は死ぬ、そして美人は既に氣狂ひ、
 西の餘光も次第に霞んで松明の命もしばらく、あゝ浮世五十年が其松明と共に早
 終りでした。

すつくと立ち上がつて一度目をすゑ、そしてまた美人は高笑ひを森の木の間
 響かせました。物すこい山彦の聲も消え切らぬ間、熱いと言ひなま帯をどくどく、
 見る間人前で丸裸、雪の肌は開をも穿つ、うの丸裸のまゝたちまち駈け出して、
 うして何を言ふかと思へば、「女御や女御！」

あくる日は練雨で天地もまるで開でした。其日の夕方、泉水の側のところ矢
 張り丸裸のまゝ、疵も無く、瘦せもせず、たゞ蒼ざめて死んで居たのは雲鬢の匂ひ、
 花顔の色猶昨日のまゝのいちご姫、まだ人の寄らぬ間は二三疋犬が寄つて其腹な

を嘗めて居ました。
 あゝ哲女一生の征途も惟れば一度境遇をあやまつて即ち是れ。つらく思へば
 天の愛は元平等、世の運もまた定理。つゞり了って筆のけがれにしばらく茫然と
 して更らに哲婦傾城論を緋いて古先生に接すれば、肝無鹽も決して無駄では無い
 ものです。
 (をばり)

16/11/36

明治廿五年二月二十六日印刷
 同 年二月二十九日出版

定價金七十五圓

著者

發行者

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

金港堂書籍會社

代售者本郷區芝園町二番地
金港堂書籍會社副社長

三宅米吉

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

日置九郎

大阪市東區南本町四丁目

金港堂

宮城縣仙臺市國分町五丁目

金港堂

東京市日本橋區吳服町

野口幾太郎

萬里館

版權所有

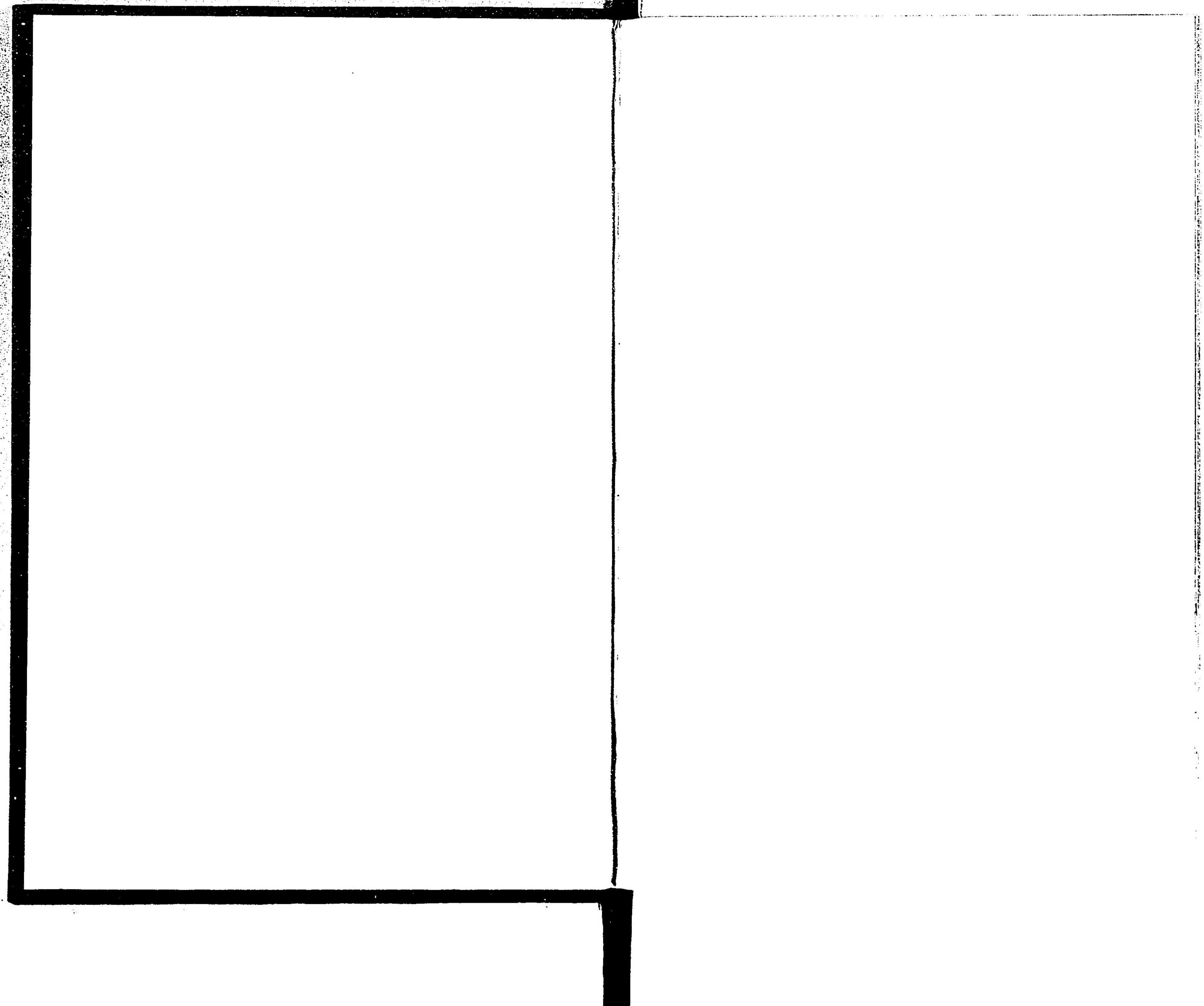
印刷者

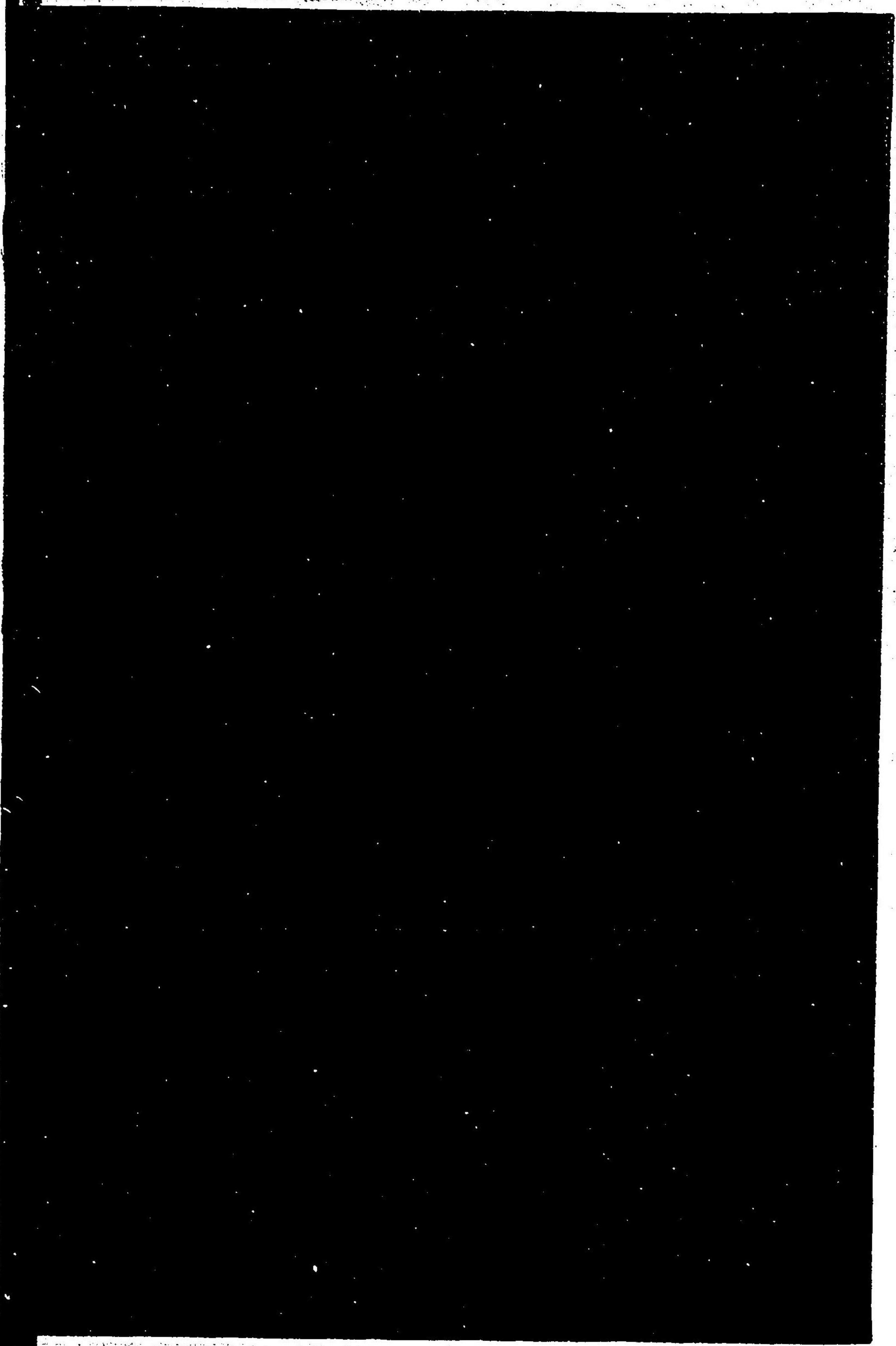
大賣捌所

印刷所

THU

18





27
59

092875-000-9

27-59

いちご姫

山田 美妙/著

M25

DBQ-0173



